三重県埋蔵文化財調査報告153

宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ

――志郡三雲町上ノ庄所在遺跡の調査―

１９９７・３

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の中央部に位置します一志郡三雲町には、堀坂山山系から流れ出る数々の小河川が流れております。山麓部には扇状地を形成し、三雲町内では沖積平野が広がっております。

三雲町には、著名な中ノ庄遺跡があります。この遺跡は、伊勢平野でいち早く稲作農耕を取り入れた遺跡として著名で、三重県の弥生時代を告げる遺跡として全国的にも著名であります。また、時代はぐっと新しくなりますが、江戸時代末期には北海道を探索し、その発展の礎を築いた松浦武四郎を育んだ地でもあります。このように三雲町は、歴史的転換の場面において、三重県でもとくに重要なエポック・メーカーとして存在し続けた地と言えるのではないでしょうか。

今回発掘調査をいたしました宮ノ腰遺跡からは、古墳が築かれるようになって間もない時期の川跡が確認され、そこから数多くの土器類や木製農具類が出土しました。これまで三雲町内の発掘調査事例はあまり多くはありませんが、宮ノ腰遺跡から確認された遺物類は、低地における豊かな生活を物語る雄弁な資料と考えております。

今回の発掘調査は、県道改良事業に伴って緊急発掘調査を実施したものです。このような貴重な遺跡が、記録保存というかたちでしか残せないのは残念というほかありません。また、調査が終わればそれでおしまいというものでもありません。調査の成果を三重県の財産としてどのように活用していくかが、今後の我々に課せられた重要な問題と考えております。

調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、三雲町役場、三雲町教育委員会、県土木部・久居土木事務所から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

１９９７年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　奥　村　敏　夫

例　言

1　本書は、三重県一志郡三雲町上ノ庄字宮ノ腰地内に所在する宮ノ腰遺跡の発掘調査報告書である。

2　この発掘調査は、主要地方道松坂久居線緊急地方道路整備事業に伴い実施したものである。

3　宮ノ腰遺跡は、上記2の同一事業により、次年度以降にも発掘調査がある。そのため、書名を『宮ノ腰遺跡発掘調査報告』Ⅰとする。

4　調査は平成8年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

主幹兼調査第一課長　吉水康夫、調査第一課第二係長　杉谷政樹

技　師　伊藤裕偉

5　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真、執筆及び全体の編集は、伊藤裕偉が行った。

6　調査にあたっては、三雲町在住の各位、三雲町役場、三雲町教育委員会、および県土木部道路建設課・久居土木事務所から多大な協力を受けたことを明記する。

7　挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏6°20′（昭和62年）である。

8　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

9　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき……「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。

わん……「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

10　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けた。

ＳＤ……溝　　ＳＥ……井戸　　ＳＨ……竪穴住居　　ＳＫ……土坑

ＳＲ……河道　　pit……ピット、柱穴

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言……(1)
1　調査の契機……(1)
2　調査の経過……(1)
3　調査の方法……(2)
4　遺跡の名称について……(2)
Ⅱ　位置と環境……(3)
Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～……(6)
1　調査区の地形と基本層位……(6)
2　検出した遺構……(6)
a　古墳時代の遺構……(6)
b　中世の遺構……(10)
c　近代の遺構……(12)
Ⅳ　調査の成果～出土遺物～……(13)
1　弥生時代の遺物……(13)
2　古墳時代の土器……(13)
3　古墳時代の木製品……(15)
4　中世前期の遺物……(15)
5　中世後期の遺物……(16)
6　近代の遺物……(16)
Ⅴ　まとめと課題……(31)
1　弥生前期の遺物について……(31)
2　古墳時代の遺構について……(31)
3　古墳時代前期の遺物について……(31)
4　古墳時代中後期の遺物について……(32)
5　中世の遺構について……(32)
6　小結……(32)

図　版　目　次

ＰＬ．１　調査区全景ほか
ＰＬ．２　河道ＳＲ13(1)
ＰＬ．３　河道ＳＲ13(2)
ＰＬ．４　河道ＳＲ13(3)
ＰＬ．５　河道ＳＲ13(4)
ＰＬ．６　河道ＳＲ12・竪穴住居ＳＨ24
ＰＬ．７　河道ＳＲ18・20
ＰＬ．８　中世遺構面
ＰＬ．９　溝ＳＤ11・井戸ＳＥ８
ＰＬ．10　井戸ＳＥ17(1)
ＰＬ．11　井戸ＳＥ17(2)
ＰＬ．12　出土遺物(1)
ＰＬ．13　出土遺物(2)
ＰＬ．14　出土遺物(3)
ＰＬ．15　出土遺物(4)
ＰＬ．16　出土遺物(5)
ＰＬ．17　出土遺物(6)

挿　図　目　次

fig．1　宮ノ腰遺跡周辺の主要遺跡
fig．2　調査区周辺地形図
fig．3　調査区北壁土層図
fig．4　河道ＳＲ13他土層図
fig．5　古墳時代遺構平面図
fig．6　竪穴住居ＳＨ24平面・断面図
fig．7　中世以降の遺構平面図
fig．8　井戸ＳＥ17平面・立面図
fig．9　弥生時代前期土器実測図
fig.10　河道ＳＲ12出土土器
fig.11　河道ＳＲ13下層出土土器(1)
fig.12　河道ＳＲ13下層出土土器(2)
fig.13　河道ＳＲ13上層出土土器(1)
fig.14　河道ＳＲ13上層(2)および
　　その他の遺構出土土器
fig.15　河道ＳＲ13下層出土木製品
fig.16　河道ＳＲ13上層出土木製品
fig.17　出土中世遺物実測図
fig.18　井戸ＳＥ17の土器枠

表　目　次

tab．1　出土遺物観察表(1)
tab．2　出土遺物観察表(2)
tab．3　出土遺物観察表(3)
tab．4　出土遺物観察表(4)
tab．5　出土遺物観察表(5)
tab．6　出土木製品観察表

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

県道松阪久居線は、国道23号線西方を走る交通路として機能している。とくに、三雲町・嬉野町・松阪市北部に居住する人々にとっては、利用頻度の極めて高いルートといえよう。

しかし、三雲町上ノ庄地内から嬉野町黒野を経て嬉野町下竜王野地内にかけての本線は、旧来からの集落内を通過している。そのため、部分的に対向不可能な場所があり、自家用車通勤に頼らざるを得ない当地の交通事情のなかで、随分な支障をきたしていた。このため、狭い道が多い三雲町上ノ庄地内から嬉野町下竜王野地内にかけて、あらたな路線を設けることとなった。

当埋蔵文化財センターでは、公共事業着工の事前に、県関連部局から事業照会を受けており、この路線についても文化財の有無に関する文書が提出された。それをもとに路線全線の遺物散布状況を調査したところ、三雲町上ノ庄字宮ノ腰地内と字北出地内における試掘調査が必要という判断に至った。

この調査ののち、平成７年11月に、当センター係長・杉谷政樹を担当として試掘調査を実施したところ、宮ノ腰地内の２地区と北出地内の２地区の計４地区において発掘調査が必要という判断に至った。今回の発掘調査地は、試掘調査段階で「宮ノ腰遺跡Ａ地区」と呼称していた箇所にあたる。

2　調査の経過

a　調査経過概要

調査は、10月末から重機による表土掘削を行い、11月５日から作業員を入れての調査となった。調査区は水位が高く、常に排水を行わなければ水浸しの状態であった。基盤上層が粘土層であるため、清掃の行いにくい調査であった。しかし、河道を中心とした遺構であったため、掘削そのものは順調に進み、12月中旬には終了することができた。最終的な調査面積は1,130㎡であった。

調査は、作業員各位の努力により、無事終了することができた。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

石井哲夫、伊豆川俊江、大西明子、小笠原錦一、
小川恵美子、神戸節子、北川孝子、北川はつ子、
黒瀬敏子、雲切永子、後藤正郎、杉山豊治、
田中　昭、田中艶子、田中とし子、田中武一、
田中初子、田中満子、中西公子、中西政子、
西川千恵、平田敏之、平田正男、藤田豊子、
山際弘子、山本優美子、

b　調査日誌（抄）

10月29～31日　重機掘削
11月１日　道具搬入
11月５日　人力調査開始。ピット・溝等検出。
11月６日　古墳時代の河道埋土から、弥生前期土器出土。
11月７日　ピットなどの掘削。ＳＥ８掘削。
11月13日　ＳＤ11掘削。
11月15日　ＳＲ12掘削。土器多い。ＳＲ13上層にて、甕・甕などの良好なもの出土。
11月19日　19世紀頃の井戸ＳＥ17を検出。常滑産と思われる土器枠。今年はこの手の井戸に縁がある。
11月26日　ＳＲ13上層の出土状況の写真。ＳＲ18の掘削開始。
11月28日　調査区南半の中世遺構面実測用ポイント設定（伊藤・木野本和之）。
12月２日　発電器故障！まいった。
12月３日　遺構面に霜が降りた。ＳＲ13からナスビ形鋤出土。
12月４日　ＳＲ13から鋤の把手出土。調査区南半の中世遺構面写真。
12月６日　南半部の下層遺構調査開始。
12月10日　下層調査区から、カマドを持つ竪穴住居ＳＨ24を確認。
12月11日　ＳＨ24の調査。カマド中央に小形甕倒立。調査区全体の清掃・片づけ。
12月11日　全体写真、測量（伊藤・木野本）。ベルト・コンベアーの撤収。
12月13日　土層図ほか作成。

12月15日　現地説明会。80名の参加があった。
12月17日　ＳＥ17の断ち割り。結桶を確認。
12月18日　下層調査区の南部への重機による拡張。
　　竪穴住居等は確認されず。
12月20日　道具の撤収。引き渡し。

c　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。
・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成８年９月26日付け道建第1543号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成９年１月９日付け教文第５６号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
平成９年１月13日付け教文第６－６号(県教育長通知)

3　調査の方法

a　小地区設定について

今回の調査では、調査区内を４m四方の升目で切ることによって小地区を設定した。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は、国土座標軸とは無関係である。

b　遺構図面について

調査区の平面図は、南半の中世遺構面を1/50で、河道を中心とした北半は1/100で作成している。また、竪穴住居・井戸などの遺構は、個別に1/10の実測図を作成している。

4　遺跡の名称について

宮ノ腰遺跡は、昭和47年度にすでに「宮の越遺跡」という名称で試掘調査がなされ、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土している（１）。また、周知の埋蔵文化財としては、やはり「宮の越遺跡」として遺跡登録台帳に記述されている。今回の調査区も、原則的にはこれらの遺跡と同一のものではある。しかし、現在の字名は「宮ノ腰」である。また、台帳は30年以上前の記述であるため、いまひとつ範囲が明らかでない。

これらのことから、遺跡名は現在の小字である「宮ノ腰」を用い、fig.１に示した範囲を「宮ノ腰遺跡」として認識する。ただし、現在の当地は圃場整備が終了している地域であり、範囲については流動的なものと考える必要がある。したがって、周辺に開発がある場合にはここに示した範囲にこだわることなく試掘調査を実施する必要があることを強調しておく。

註

（１）吉水康夫「宮の越遺跡」（『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1973）

II　位置と環境

宮ノ腰遺跡は、一志郡三雲町上ノ庄字宮ノ腰に所在する遺跡群である。標高約５ｍの沖積地に位置している。上ノ庄の集落は、この遺跡の南部にある。

三雲町は、西方約４kmの堀坂山山系から流れ出る三渡川・岩内川・堀坂川などの小河川によって形成された平地にあたり、近隣に丘陵の全く見られないところである。宮ノ腰遺跡は、現状では岩内川と堀坂川とに挟まれている。

三雲町は、旧郡でも一志郡に相当する。しかし、大部分の一志郡が雲出川水系であるのに対し、上記のように堀坂山関連水系によって形成された沖積地であるため、単純に一志郡内として一くくりに把握することは妥当でない。つまりこの地域は、北は雲出川水系、南は坂内川水系（飯高郡）とにはさまれた小地域として見ていく必要があるといえる。

では、この地域にはどのような歴史的展開が見られるのであろうか。概観してみる。

縄文時代では、当遺跡のような低地部における遺跡は明確にはされていないが、西部山麓の松阪市岩内町には薮ノ下遺跡(1)がある。縄文中期から後期を中心とした遺跡で、多くの良好な縄文土器が出土している。同じ三雲町でも雲出川にほど近い星合地区に所在する前田町屋遺跡(2)からは縄文晩期の土器が確認されていることから、宮ノ腰遺跡付近でも、今後縄文時代の遺跡が確認される可能性は高いと考えておくべきであろう。

弥生時代には、当遺跡の北東約３kmの低地に中ノ庄遺跡(3)が形成される。この遺跡からは前期中段階の遺構・遺物が確認されており、伊勢平野における最古級の弥生集落である。弥生前期の遺物は、近年嬉野町の野田遺跡(4)や庵ノ門遺跡などからも確認されており、弥生時代前期における低地部への進出は著しいものと考えられる。

古墳時代では、同じ一志郡内でも、雲出川水系中村川流域において前期古墳の造営が顕著である。十数年までには、丘陵部に造営されたもののみが認識されていたに過ぎなかった。しかし、当遺跡付近でも、松阪市大足町・大足古墳群(5)や同市深長町・深長古墳(6)など、平野部における前期古墳の確認例が増加している。三雲町内でも、前述の前田町屋遺跡で壺形埴輪を持つ古墳時代初頭の方形墳が確認されている。また、集落遺跡として、当遺跡の東方１kmにある貝塚遺跡(7)がある。さらに、今回の発掘調査によって当遺跡周辺にも古墳時代前期を中心とした集落跡が存在すると考えられる。このことから、中村川流域の古墳前期を注目していくのと同じように、堀坂山東部地域における古墳前期の動向は注目していく必要があろう。

古墳時代中期の動向はよくわからない。後期になると、当遺跡のやや上流、松阪市美濃田町に美濃田古墳群が形成されている。さらに上流の山麓部には、横穴式石室を有した数多くの群集墳が形成されている。しかしこれら山麓部の群集墳は、旧一志郡・飯高郡境付近と考えられる垣内田古墳群(8)以南（つまり旧飯高郡）に集中し、同じ堀坂山東麓部でも旧一志郡部に群集墳の確認例が乏しい(9)という傾向があり、興味深い。

当遺跡付近では、中ノ庄遺跡から円墳が確認されている。ＳＤ１として報告されているこの遺構からは、馬形埴輪や円筒埴輪などが確認されている。したがって、低地部でも微高地には古墳の築かれる場合があると考えるべきである。山麓部に形成される群集墳との対比の意味からも、このような低地部における古墳の検討は、極めて重要な意味を持つといえる。

奈良・平安時代には、山麓東部の松阪市伊勢寺町・伊勢寺遺跡(10)を中心に、数多くの集落遺跡が形成されている。また、それに隣接する伊勢寺廃寺(11)は、奈良時代を中心とする寺院跡である。このように、山麓西部でも飯高郡側には数多くの遺跡が形成されているが、同じ山麓西部でも一志郡側や、当遺跡周辺の低地部には目立った遺跡がない。しかし、中ノ庄遺跡からは伊勢で数例しか確認されていない瓦塔が出土している。瓦塔は、古代寺院の確認されていない地域における仏教文化を考えるうえで重視されており、宮ノ腰遺跡周辺にも古代寺院とされて

いる遺跡はないため、注意する必要がある。

平安時代末から南北朝時代にかけては、当地には醍醐寺領曽祢庄がある。『醍醐寺文書』所収、貞和3(1347)年9月4日付、曽祢庄百姓等請文(12)の日下署名に「上郷寂蓮　下郷円勝　久米郷右馬允」とあり、この「上郷」が現在の上ノ庄に相当するものと考えられる。したがって、宮ノ腰遺跡自体も、曽祢庄との関連で考える必要があるといえる。

室町～戦国時代には、南伊勢地域を中心に領域支配を行っていた大名・北畠氏が当地にも深く関与している。三雲町曽原に所在した曽原城は、北畠氏の支城に準ずるものと考えられ、戦国末期の織田氏の侵攻後にも機能していたものと考えられる。また、三雲町内に居住していたと考えられる北畠氏被官に佐藤氏があり、ここの文書である『佐藤文書』(13)は、数少ない北畠氏関連史料として貴重である。

以上、宮ノ腰遺跡周辺の歴史的環境を通観してきた。当遺跡周辺の状況はあまり判明していないが、隣接する地域との比較からみても、重要な歴史的背景を持つ地域と考えることができる。低地部の解明は、はじまったばかりなのである。

註

(1)田村陽一「薮ノ下遺跡」（『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊1　三重県埋蔵文化財センター　1990）

(2)平成8年度三重県埋蔵文化財センター調査

(3)谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1972）

(4)和気清章『野田遺跡発掘調査報告』（嬉野町教育委員会　1995）

(5)小林秀「大足遺跡」（『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊　三重県埋蔵文化財センター　1990）

(6)増田安生「深長古墳」（『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊　三重県教育委員会　1987）

(7)伊藤克幸「貝塚遺跡」（『昭和51年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1977）

(8)前川嘉宏「垣内田古墳群」（『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊2　1990）

(9)松阪市と嬉野町との境に存在していた小野古墳群は、横穴式石室を有していた群集墳であったのが唯一の例といえる（松阪市『松阪市史』第2巻資料編考古　1978）。しかし、これにしてもここで問題としている地域の北端部にあたり、松阪市小野町から岩内町にかけての山麓部に群集墳といえるようなものが乏しいことに違いはない。

(10)竹内英昭「伊勢寺遺跡」（『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊　三重県埋蔵文化財センター　1991）

(11)倉田直純「伊勢寺廃寺」（『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1990）

(12)小林秀氏の御教示による。

(13)石水博物館（津市）所蔵

fig.1　宮ノ腰遺跡周辺の主要遺跡（1：50,000　国土地理院1／25,000「松阪」「大河内」「大仰」「松阪港」より）

fig. 2　調査区周辺地形図（1：2,500）

III　調査の成果 ～層位と遺構～

1　調査区の地形と基本層位

調査区は、調査前の標高で約５ｍの低地に位置する。既に圃場整備事業が完了している地域である。

今回の調査で確認された遺構は、大きくは古墳時代と平安時代末～戦国時代（以下、この時期を「中世」とする）の２時期に区分される。層位的にも、この２時期の遺構面は異なる。古墳時代の遺構はさらに細分でき、前期には河道、中期には河道と住居跡、後期には河道が確認できる。中世には、小規模な流路と、掘立柱建物を中心とした集落が形成されていたものと考えられる。

a　層位

遺跡全体の基盤となるのは上部は黒色土で、その下層として青灰色系土および黄色系土が認められる。これらは全て無遺物層と考えられる。黒色土・青灰色土・黄色系土は、それぞれ粘土系の部分と砂質系の部分が認められる。これらの土は原則的には堆積土であるため、このようなあり方は、遺跡が形成される以前にもこの地に流路が存在していたことを示すものと考えられる。黒色土は、いわゆる「黒ボク」で、純粋なものではなく、２次的な堆積によるものと考えられる。

古墳時代の河道は、層位的には全てこの基盤層を切り込んでいる。古墳時代前期の流路は調査区北部に集中し、調査区全体への層位的影響は少ない。古墳時代中期では、前期に形成された流路上に流路が認められる。また、調査区南部にも１条流路が認められる。中期の流路は、深さはないものの、幅員は前期以上にあり、部分的に中世遺構面の基盤となっている。後期の流路は調査区南部を中心に認められ、狭い復員の流路が数条認められる。この段階では、中期までの流路はほとんど埋没していた模様で、調査区北部では後期の流路は認められない。それに対し、調査区南部では全体的にこの段階の堆積土が広がっており、各々の流路は幅員こそ狭いものの、これらが一体となって流れてきた様相を呈している。

中世の遺構面は、この古墳時代後期に形成された堆積土上において検出できる。中世遺構の埋土は灰褐色系砂質土で、部分的にはこの土が層として認識でき、包含層となっている。中世遺構は、調査区南部においてのみ検出されたため、古墳時代中期以前の流路が形成されていた調査区北部は居住に適さなかったものと思われる。

中世包含層の上には部分的に茶灰色砂質土があり、圃場整備以前の旧表土に相当するものと考えられる。

旧表土上には部分的に客土層が認められ、前述の圃場整備事業段階での埋め立てによるものと考えられる。そして現表土に達する。この状況から、圃場整備段階における削平は、あまり激しいものではないと考えられる。

中世遺構面は、標高約4.7ｍである。黒色土は、標高約4.4ｍで検出できた。黒色土の検出高は、調査区南部ほど高く、南部が微高地となっていたものと考えられる。

2　検出した遺構

今回の調査で確認できた遺構は、先述のように大きく古墳時代と中世とに分かれ、近世の井戸も確認された。ここでは主な遺構について記述する。

a　古墳時代の遺構

古墳時代の遺構に相当するには、流路と竪穴住居がある。河道は、厳密には遺構ではないが、便宜上、遺構として取り扱う。時期的には、前期・中期・後期のものがある。

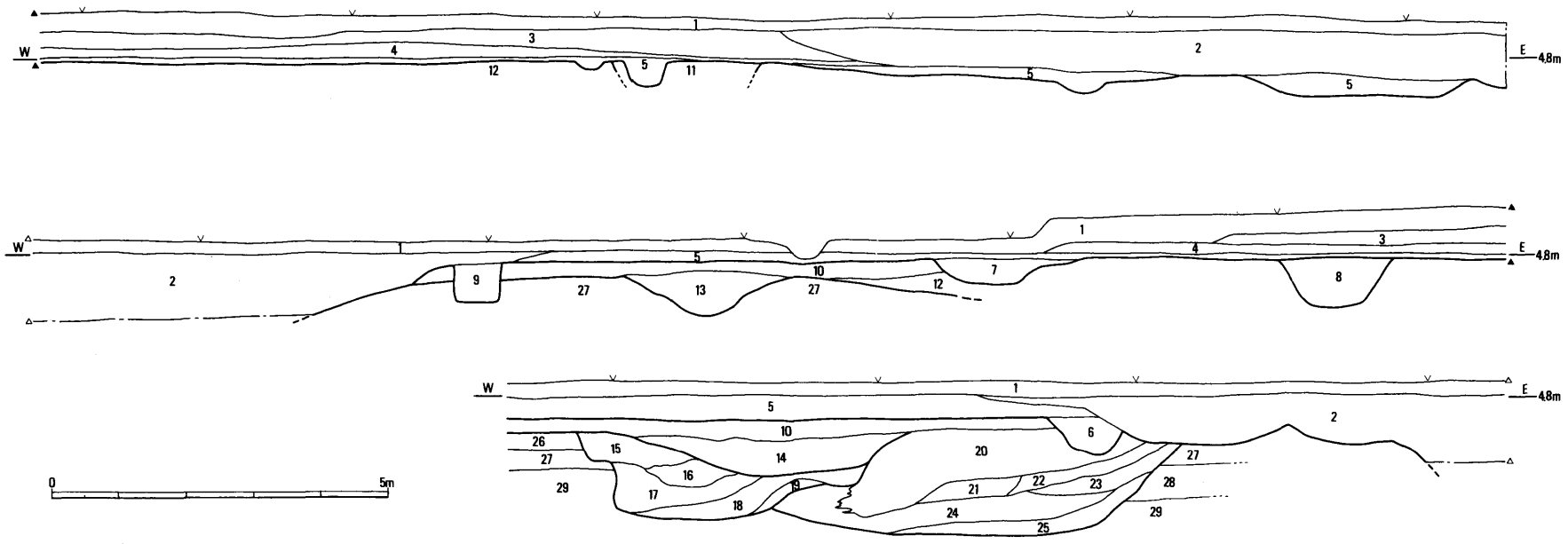
古墳時代前期

河道２条を確認した。

河道ＳＲ11　　調査区北部で検出した河道である。埋土は、淡灰系砂および暗灰色系砂質シルトの互層である。幅約２ｍ、深さ約1.2ｍで、北流している。確認部北端で、河道ＳＲ13と合流する。堆積の状況から、ＳＲ13よりも若干新しいようである。埋土中には、元屋敷期を中心とした土器類が多く含まれていた。

河道ＳＲ13（下層）　　調査区北部で検出した河道である。基本埋土は、淡灰系砂および暗灰色系砂質シルトの互層である。幅約８ｍ、深さ約２ｍで、

fig. 3　調査区北壁土層図（1：100）



1．表土
2．客土、撹乱土
3．淡褐色砂質土
4．灰茶色砂質土
5．灰褐色砂質土（ＳＤ１他）
6．褐色砂（ＳＲ14）
7．灰褐色砂質土（ＳＤ11）
8．橙灰色砂
9．淡灰色土（近代）
10．暗褐色砂質土
11．橙灰色砂
12．砂、礫含む暗褐色砂
13．橙褐砂
14．砂含む黒灰色粘質土（ＳＲ13上層）
15．淡黄灰色砂淡灰褐色砂質シルトの互層
16．淡黄灰色砂
17．淡灰色砂
18．淡灰色砂・暗灰色砂質シルトの互層
19．淡黄灰色粗砂
20．暗褐色砂質・シルト褐色砂の互層
21．淡黄灰色砂
22．暗灰色砂質シルト・砂層と互層
23．淡灰色砂・暗褐色砂質シルトと互層
24．淡黄灰色粗砂
25．淡褐色粗砂
26．黄褐色土
27．黒色粘質土（黒ボク２次堆積層）
28．青灰色粘土
29．黄褐色砂・礫

15～19：ＳＲ12，20～25：ＳＲ13下層，26～29：基盤層

北流している。途中に河道内に岬状に突出した部分があるが、人為的なものではない。確認部北端で、河道ＳＲ11と合流する。堆積の状況から、ＳＲ11よりも若干古いようである。埋土中には、欠山期～元屋敷期を中心とした土器類や木製農具類が多く含まれていた。

古墳時代中期

河道２条と竪穴住居２棟を確認した。

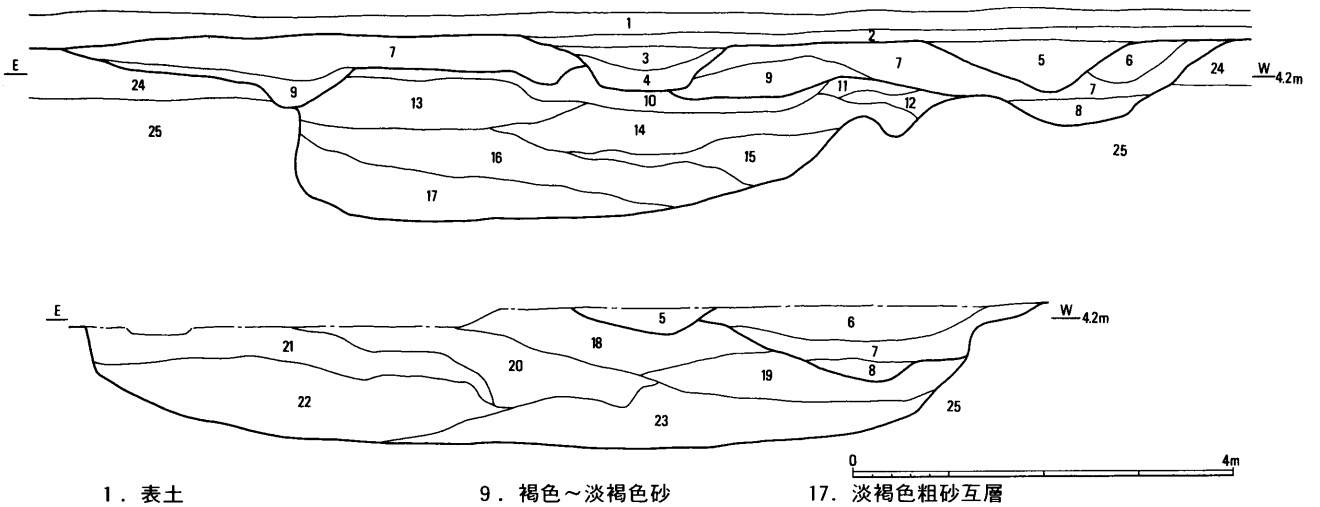
河道ＳＲ13（上層）　調査区北部で検出した河道である。古墳時代前期の河道（ＳＲ13下層）がそのまま流路となる。基本埋土は黒褐色粘質土で、淡灰系砂との互層である。最大幅約９ｍとやや広くなるが、深さは最深１ｍ程度である。北流している。北岸側がやや深くなり、ここから建築部材などの木製品や土器類が多く出土した。確認部北端の南岸には、一部杭列も認められた。

河道ＳＲ25　調査区南部で検出した河道である。竪穴住居ＳＨ24の南にあたる。幅約２ｍ、深さ約0.4mで、北流しているものと考えられる。上層から、須恵器・土師器類が多く認められた。

竪穴住居ＳＨ24（fig.６）　調査区南部中央付近で検出した遺構である。平面不正方形で、東西約４ｍ、南北約3.6mである。古墳時代後期の河道ＳＲ23によって大幅に削平されている。このため、遺構の深さは約0.1m程度しか確認できなかった。壁周溝および主柱穴も確認できなかった。

南東辺中央にはカマドがある。黄色系粘土で床面上に構築されている。ＳＲ23による削平が大きく、中央部は消失している。しかし、カマド中央には小形甕の下半が倒立した状況で置かれており、支柱としていたものと思われる。この甕を中心に、赤く焼けた粘土が確認できる。

床には、黒色土と黄色系土を混ぜた貼床が認められる。



1．表土
2．淡黄褐色砂質土
3．灰褐色砂質土
4．黒灰色砂質土
5．褐色砂・灰褐色土の互層
6．褐色砂・褐色粘土の互層
7．砂層含む黒褐色粘質土
8．淡褐色砂と黒褐色粘土の互層
9．褐色～淡褐色砂
10．青灰色～淡褐色砂
11．黒色粘質土
12．青灰色粘質土
13．淡灰色粗砂
14．淡褐色粗砂
15．黒褐色粘質土・砂と互層
16．淡褐色粗砂互層
17．淡褐色粗砂互層
18．暗青灰色砂質シルト・淡褐色砂と互層
19．褐色粗砂・暗灰色砂質シルトの互層
20．暗褐色砂質シルト・褐色砂の互層
21．褐色粗砂・暗灰色砂質シルトの互層
22．灰色粗砂・礫・暗灰色砂質シルトの互層
23．褐色粗砂・淡褐色砂の互層
24．黒色粘質土（黒ボク２次堆積土）
25．青灰色粘土～黄色砂礫

3～4：ＳＤ11，　5：ＳＲ14，6～9：ＳＲ13上層，10～23：ＳＲ13下層

fig.４　河道ＳＲ１３　他　土層（１：８０）

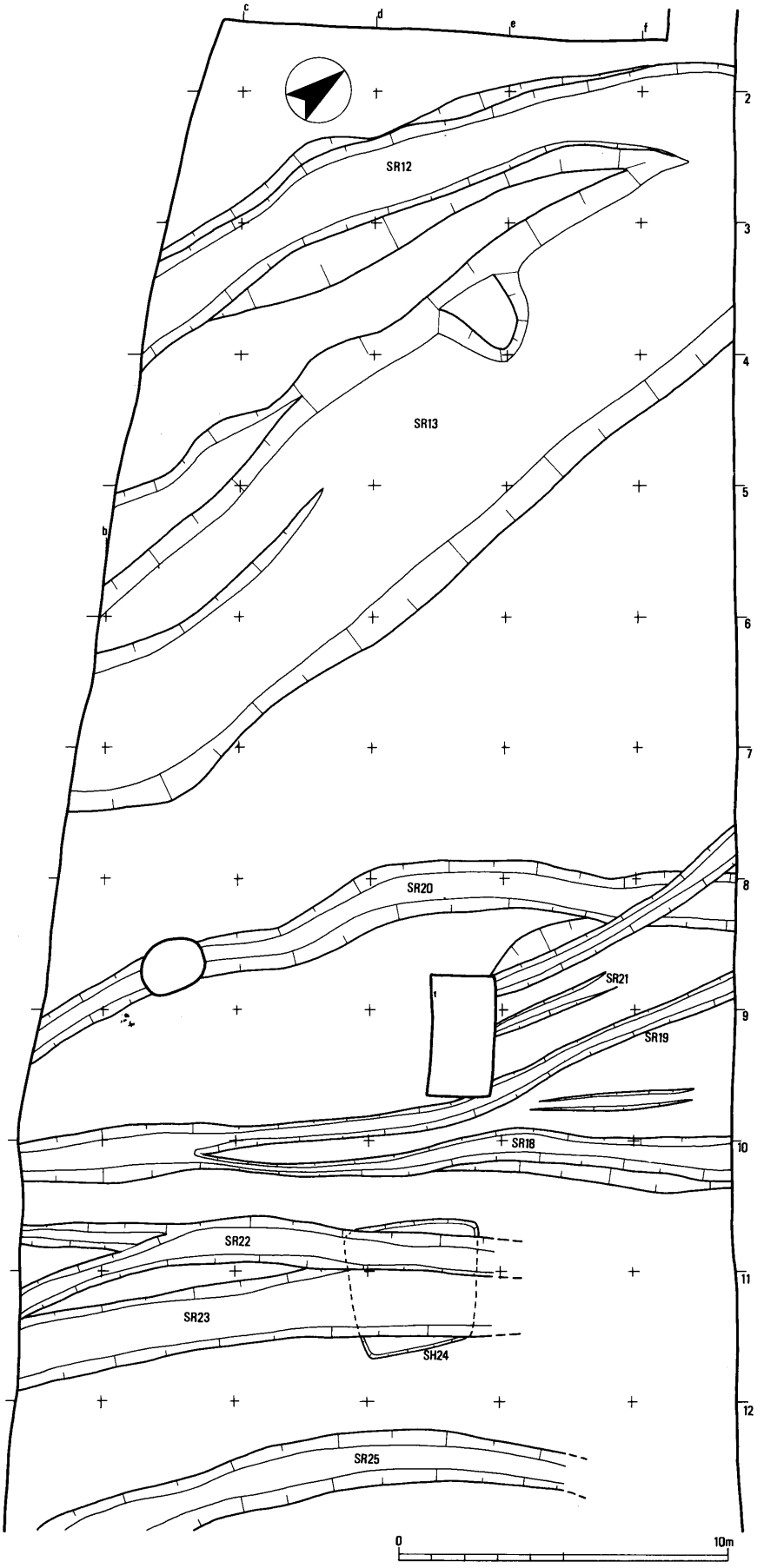


fig. 5　古墳時代遺構平面図（1：200）

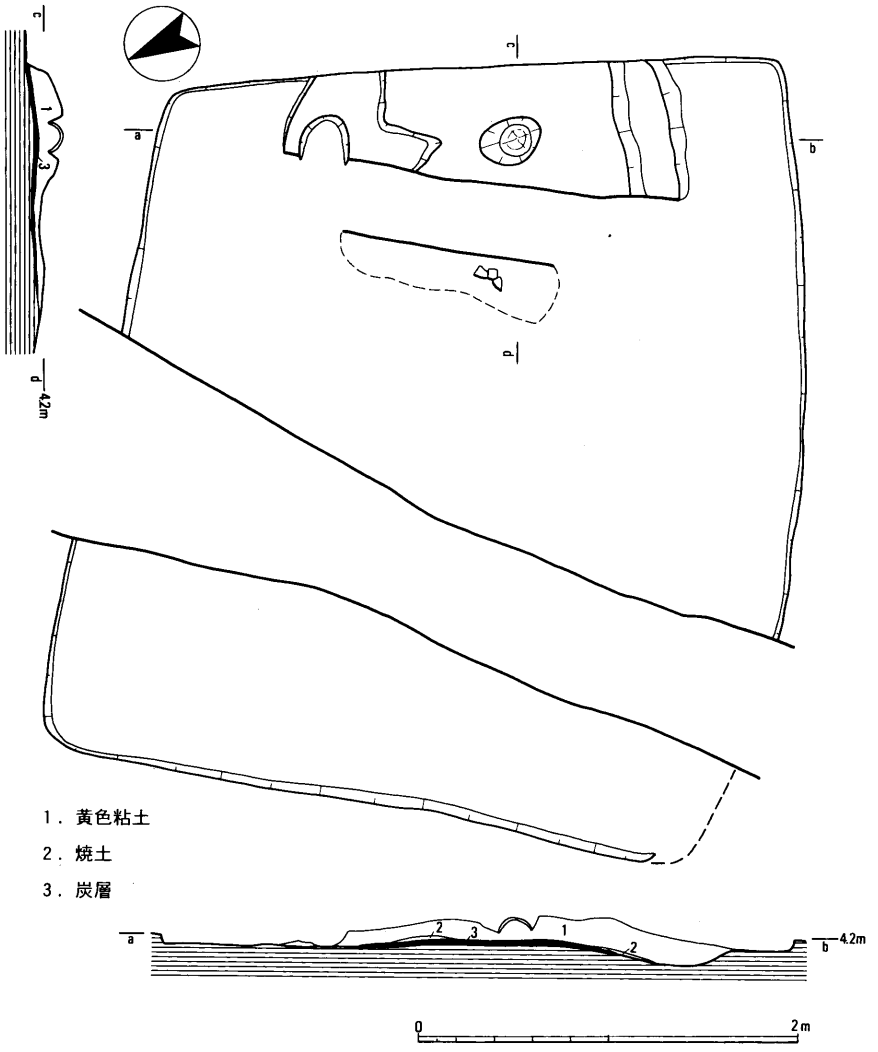


fig. 6　竪穴住居SH２４　平面・断面図（１：40）

出土遺物には、カマドに置かれた小形甕のほか、土師器壷などがある。

古墳時代後期

河道４条ほどを確認した。

河道ＳＲ18・19・21　調査区中央部で確認した。３条の河道として調査を行ったが、原則的には同一のものであろう。基本埋土は橙灰色系砂で、褐色粘質土との互層となる。ＳＲ18の最大幅は約２ｍである。須恵器・土師器が出土している。

河道ＳＲ20　調査区中央部で確認した。基本埋土は橙灰色系砂と褐色粘質土との互層である。最大幅は約1.5mである。須恵器・土師器が出土している。

河道ＳＲ22・23　調査区中央部南寄りで確認した。３条の河道があるが、原則的には同一のもので、確認範囲の中央でＳＲ23と合流する。基本埋土は橙灰色系粗砂である。ＳＨ24を削平している。ＳＲ23の最大幅は約３ｍである。須恵器・土師器が出土している。

ｂ　中世の遺構

中世の遺構は、平安時代末頃のものと室町～戦国時代のものの２時期に分かれる。平安時代末頃の遺構は溝ＳＤ11とＳＲ14がある。

数多く確認されているピットは、主に戦国時代のものを中心としている。遺構としては良好に確認できるもので、掘立柱建物の柱穴であることは間違いない。しかし、建物としてまとめることはできなかった。

溝ＳＤ11　調査区中央部で確認した遺構である。平面「く」の字形を呈している。幅約1.2m、深さ約0.5mで、断面逆台形を呈する。12世紀中～後葉頃の陶器椀（山茶椀）や白磁類が出土している。

溝ＳＤ１　調査区南端にて検出した遺構である。

南肩の大部分が調査区外であるが、断面形状から溝と判断してよかろう。断面逆台形で、幅約6.5m、深さ約0.2mの浅いものである。埋土中からは、15世紀末から16世紀前葉の土師器類が出土している。

溝ＳＤ４　調査区南半西部で検出した遺構である。途中で途切れる浅いものである。幅約0.8m、深さ約0.1mである。15世紀末から16世紀前葉の土師器類が出土している。

土坑ＳＫ５　調査区南半東部で検出した遺構である。溝ＳＤ６が取り付く。平面方形で、長辺約2.1m、短辺約1.6m、深さ約0.2mである。15世紀中～後葉の土師器類が出土している。

井戸ＳＥ８　調査区南半中央部で検出した遺構である。平面円形で、直径約1.8m、深さ約0.8mである。底は、青灰色系粘土層にて止まる。木枠・石組などの施設は確認されなかった。しかし、素掘り井戸とするよりは、木枠を有していたものとして考えるべきであろう。15世紀中～後葉の土師器類が出土している。

ｃ　近代の遺構

近代のものとして、ＳＲ13の北端部分に方形の地割を確認した。この地割の西隅で、井戸ＳＥ17を検出した。

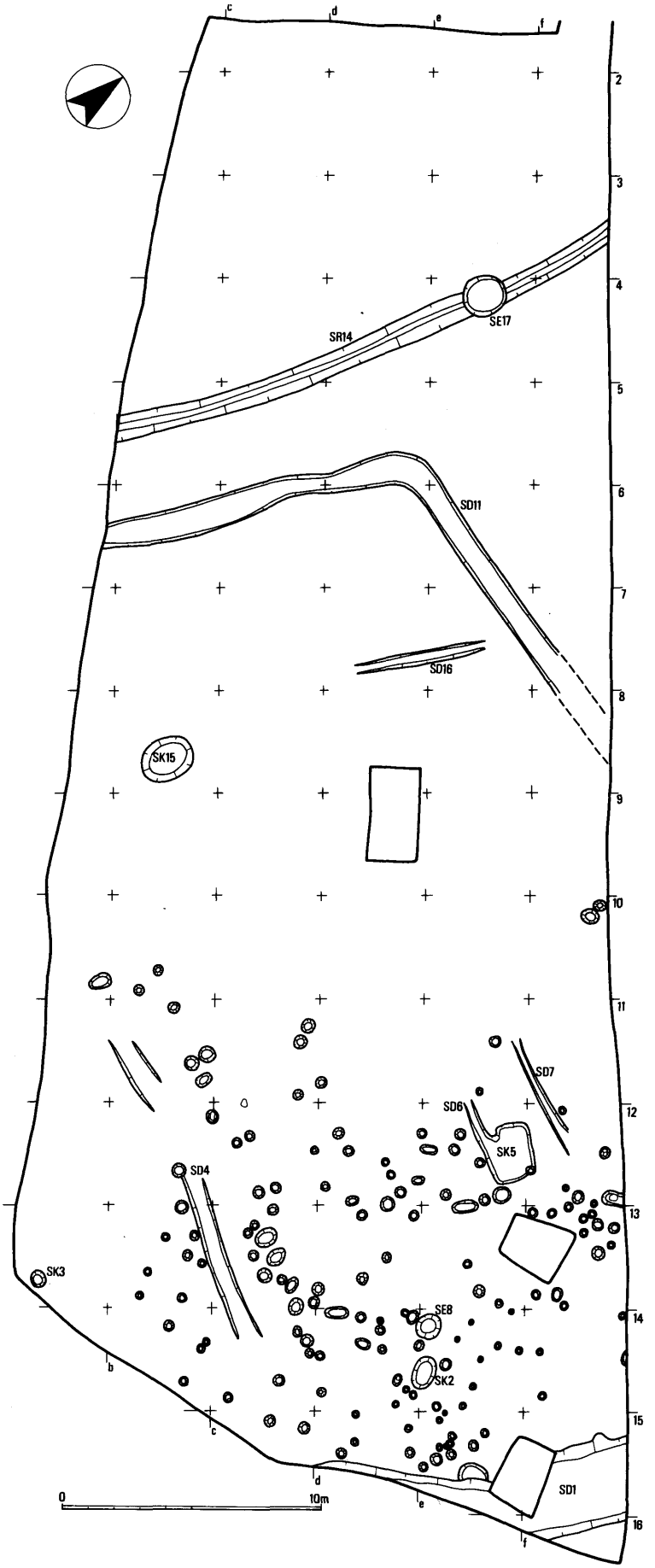


fig. 7　中世以降の遺構平面図(1:２５０)

井戸ＳＥ17（fig.22）　調査区北部で検出した遺構である。古墳時代前期の河道ＳＲ13の埋土内に穿たれている。直径約1.5mの楕円形の掘形内に、直径約55cm、高さ約78cmの結桶を配置し、その直上に口縁部径約58cm、高さ約18cmの陶器枠を据える（土器枠Ａ）。さらに、その陶器枠を挟み込むように口縁部径約68cm、高さ約38cmの陶器枠を２段以上据えている（土器枠Ｂ）。井戸の底は、標高約３mほどのところで、ＳＲ13の埋土内で収まっている。

結桶は、２条１対の竹製タガが３ヶ所に認められる。下から20cmの位置には、水抜き用と見られる方形の孔が、鋸状のもので穿たれている。

土器枠Ｂは、下段枠に直径約５cm程度の穿孔が開けられている。内面から焼成後に突かれているようである。おそらく水抜きのためであろう。その外側には桟瓦が２枚貼り付けられていた。これは、穿孔時に誤って枠そのものを破壊してしまったため、その補修として用いたれたものと考えられる。

井戸掘形からは桟瓦が、井戸枠内埋土中からは陶磁器類が出土しているが、あまり多くはない。おそらく、19世紀代のものであろう。

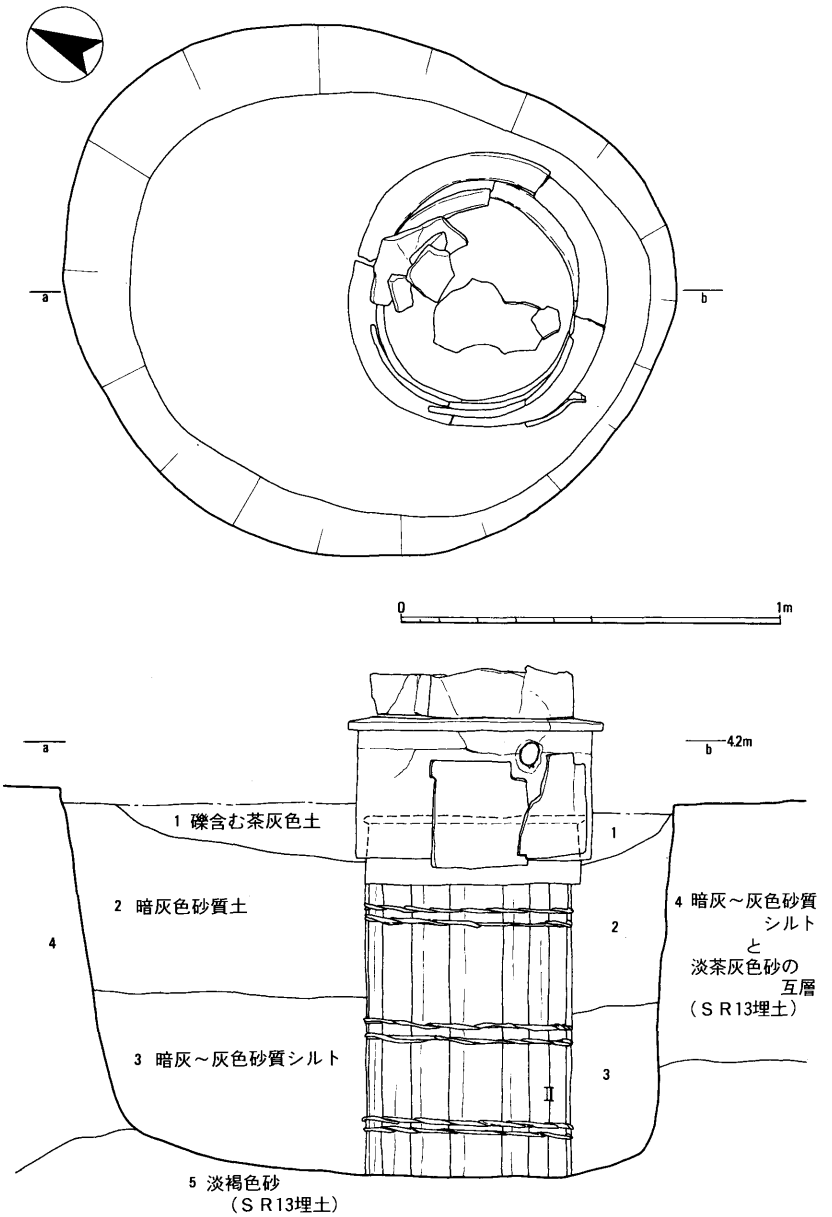


fig. 8　井戸SE１７　平面・断面図（１：20）

Ⅳ　調査の成果　～出土遺物～

出土した遺物は、整理箱に換算して約33箱である。弥生時代から近代までのものがある。以下、出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細については出土遺物観察表（tab.１～６）を参照されたい。

１　弥生時代の遺物（fig.９）

甕あるいは鉢(1)と壷(2)が出土している。いずれも前期に相当するものである。壷は、外面にミガキ調整の痕跡があるが、磨滅が顕著で判然とはしない。前期でも中段階[1]以前のものであろう。１は、口縁部外面にキザミ目文を、頸部外面にヘラ描きの横線文を施す。

２　古墳時代の土器（fig.10～14）

前期から後期までのものがある。土器類と木製品類とがある。

a　前期（fig.10～12）

前期の土器は、ＳＲ12・13下層から数多く出土している。

河道ＳＲ12出土土器（３～22）

小形丸底壷(3)、小形器台(4)、小形鉢(5)、高杯(6～11)、広口壷(12～17)、甕(18～22)がある。

小形丸底壷(3)は口縁部を欠損する。布留期でも古段階に相当するものである。

高杯には、弥生時代後期のもの(6)もあるが、脚部裾が若干内彎するもの(11)と外反するもの(7～9)が主体であり、おおよそ元屋敷期古段階[2]に並行するものと考えられる。

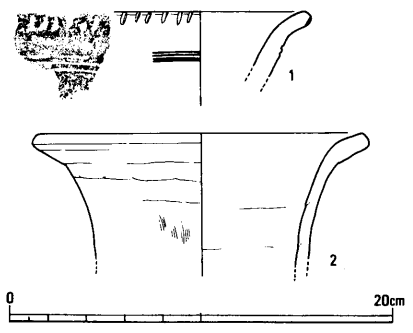


fig.９　弥生時代前期土器実測図（１：４）

広口壷には、口縁端部に加飾するもの(12・15・17)と、無文のもの(13・14・16)がある。また、頸部に突帯状の装飾を施すものもあり(14・16)、この点からも分類は可能かと考えられる。17は、口縁部内外面に朱彩が見られる。

甕は18を除いて台付甕である。18は受口状の口縁部、22は厚手の脚台部で、その他の甕よりは時期的に古いものと考えられる。19～21は、いわゆる「Ｓ字状口縁台付甕」で、型式的には19・20→21の変化が想定できる。安達厚三氏の分類[3]でいうⅡ類・ⅢＡ類に、赤塚次郎氏の分類[4]ではＢ・Ｃ類に相当すものであろう。

河道ＳＲ13下層出土土器（23～93）

小形器台(30～32)、小形鉢(26～29)、高杯(33～41)、壷(42～61)、鉢(62)、甕(63～93)のほか、ミニチュア土器(24・25)、器種不明土器(23)がある。

小形器台には、口縁部の立ち上がりが強いもの(30)と椀状の受部をなすもの(31・32)がある。31・32は形態的には近畿地方の当該資料との共通性がある。しかし、脚柱上端部の接合方法が、当該資料が皿状の受部を製作した後に接続されるものであるのに対し、近畿地方では脚柱上端部側面に受部が接続される、いわゆる挿入付加法がよく見られる点が異なっている。31は、脚柱部上端に横方向のヘラミガキが見られ、布留式的な器形に東海的な手法を取り入れたものと考えられる。これらの要素を考慮すれば、形態は類似しているとはいえ、近畿地方との関連は、製作手法にまでは及ばないものであると考えることができる。

小形鉢は、平底を有するものである。底部が突出するもの(26・27)としないもの(28・29)とがある。後者は精緻なヘラミガキを全面に施すものであり、この地域でもあまり確認されていない形態・手法である。

高杯では、杯下部が小さく、杯上部の大きいものが主体となる。脚部では、39のようにやや内彎して広がるものもあるが、多くは37・40のようなハの字形に広がるものである。元屋敷期古段階に相当しよ

う。33は一応高杯に含めたが、壷の口縁部である可能性もある。内外面には朱彩が見られる。

壷には、いわゆる瓢壷(42～44)や台付壷(50)、さらにいわゆる「パレススタイル壷」(58)を含むが、多くは広口壷の類である。瓢壷には、体部上半に連続した山形の文様を施すもの(44)がある。

50は、底部に脚台部の剝離痕がある。非常に薄手の土器である。体部上半に見られるハケメ調整は、同時期の台付甕に見られる手法との共通性がある。

広口壷には、口縁部の施文で見ると、無文のもの(45・47～49)、施文のあるもの(51・52・54・55・58・59・61)がある。また、頸部に突帯が見られるもの(52～54・59)とないものとにも区分できる。口縁部の施文には、櫛状具によるキザミ目(51)、刺突(52)、綾杉状施文(55・58・59・61)、棒状浮文(54・58)がある。58は小片であるが、口縁部内外面に朱彩が認められるもので、いわゆる「パレススタイル壷」である。素地も白色系で、他の土器とは少し異なっている。

甕には、丸底あるいは平底と考えられるもの(63～66)と台付と考えられるもの(67～93)がある。

64はかなり粗雑なものであるが、体部内面のヘラケズリ手法や口縁端部をやや突出させる点などから、布留系甕の影響を考えることができる。63についても、同様なものと見なされよう。66は体部外面にタタキメが見られるものである。

台付甕には、小形のもの(67～70)を含む。84は少し異質で、弥生時代後期以前のものかと思われる。84・85と受口状口縁を呈する71以外は、いわゆる「S字状口縁台付甕」に相当する。型式的には、72～74→75～76→77～79→80～82の変遷が考えられる。83はやや大形のもので、80～82の一群に含められよう。これらは、SR12出土の台付甕とほぼ同様な時期と考えることができる。

なお、この他に、ミニチュア土器として24・25の高杯や、器種不明の23がある。23は、何かの把手かと思われるものである。

b　中～後期(fig.13・14)

中～後期の土器は、SR13上層やSR25上層から数多く出土している。

河道SR13上層出土土器(94～122)

須恵器では、杯類(94・95・97)、有蓋高杯(96)がある。土師器では、鉢(98～102)、高杯(103・104)、壷(105～107)、丸底ないしは長胴甕(108～112)、甑(113)、台付甕(114～122)がある。

須恵器は、田辺昭三氏による陶邑編年(以下、「田辺編年」と呼称)[5]のTK23～47型式にかけてのもの(94～96)と、TK10型式かと思われるもの(97)がある。

土師器の鉢(98～102)は、椀ないしは杯と表現した方が適切かとも思われるが、古墳時代前期の小形鉢の系譜上かと考えられるものであるため、とりあえず鉢とする。口縁部が若干屈曲して開く98のような形態から、口縁部の屈曲がなくなる99～102のような形態へと変化するものと考えられる。全て体部下半にヘラケズリを施し、口縁部にはヨコナデが見られる。98の体部外面にのみヘラミガキが見られる。

また、99の底には焼成後の穿孔がある。後述する馬形木製品とも関連して、何らかの祭祀に伴うものである可能性がある。

土師器高杯(103・104)は、土師器鉢状の丸い杯部を持つ。104の脚部には、貫通しない円孔が1ヶ所穿たれている。

土師器壷には、小形のもの(105)と、二重口縁を呈するもの(106・107)とがある。106は形態的には小形のものと共通しよう。

土師器甕には丸底で小形のもの(108・109)、丸底で長胴のもの(110～112)、台付のもの(114～122)がある。丸底で小形のものは、ともに口縁端部が内側に若干突出し、端部外面が面をなし、体部外面にはハケメが見られるものである。108は体部内面にヘラケズリが見られ、布留系甕の系譜上にあるものと考えられる。長胴甕は外面にハケメが見られない。口縁部は外反して開き、前述の小形丸底甕とは系譜を異にすると見られる。台付甕はいわゆる「S字状口縁台付甕」の系譜上のもので、口縁部形状は既にS字状をなさない段階のものである。口縁部形状を見ると、114・115→116・117・118～120の変遷が想定できる。山田猛氏の分類[6]によるD2類～F1類と考えられる。

甑(113)は、鉢(101)・甕(108)などとほぼ同一地点からまとまって出土したものである。口縁端部は断

面方形をなし、口縁部のヨコナデののち、体部外面に粗いケズリ状の板ナデを施している。体部外面には、ハケ状具により十字形の施文があり、まるで記号のようにも見える。

河道ＳＲ25出土土器(123～130)

須恵器杯類・高杯、土師器鉢・台付甕のほか、粗雑な土製品がある。

須恵器は田辺編年のＴＫ47型式頃と考えられる。

土製品(123・124)は、一見するとミニチュア土器の椀のようにも見える。しかし、124は内面にこそ指ナデ痕があるものの、外面には素地のひび割れが見られるのみで、何らの調整も加えられていない。外面のひび割れは、素地を押しつけた時に生じたものと見られ、何らかの外型に素地を押しつけて成形していると考えられる。したがって、これらは椀形のミニチュア土器とは考えにくい。焼き台やカマド(炉)に用いる何らかの台と考えておきたい。

河道ＳＲ18出土土器(131～137)

須恵器杯類、土師器高杯・甕がある。

須恵器は、田辺編年のＴＫ43～209型式頃と考えられる。

土師器高杯(133)は、椀状の杯部のみが残存している。脚柱が接続する下端には、接続のためにヘラ状具で刻んだ痕跡が見られる。

土師器甕(134～137)は、口縁部が外反して開き、口縁端部が上方に突出するものである。

河道ＳＲ22・23出土土器(138～144)

須恵器杯類・壺、土師器甕がある。

須恵器(138～142)は、田辺編年のＴＫ10型式頃からＴＫ209型式にかけてのものと考えられる。

土師器甕(143・144)は、長胴のものと考えられる。調整や形態は、ＳＫ18出土のものと大差ない。

竪穴住居ＳＨ24出土土器(145・146)

土師器の甕があるのみである。145は、形態的にはＳＲ13上層出土の112の甕に近い。

河道ＳＲ20出土土器(147)

須恵器有蓋高杯(147)がある。田辺編年のＴＫ43型式頃のものであろう。

3　古墳時代の木製品(fig.15・16)

a　前期(148～153)　農具類を中心としている。曲柄又鍬・直柄広鍬・柄などがある[7]。

曲柄又鍬(148・149)　いわゆる「ナスビ形鍬」である。ＳＲ13下層から2点出土している。ともに、笠下のくびれからの側面形が弧状を呈するが、149は中央部で若干の屈曲を持っている。149は上端を欠損し、残存長60.4cm、刃部の幅4.8cm、厚さ0.6cmである。148は刃部先端を一部欠損し、残存長67.2cm、刃部の幅約4.8cm、刃部の厚さ約0.8cmである。

柄(150)　鋤の柄と考えられるものである。把部は欠損する。柄は断面楕円形で長径約2.6cmである。

直柄広鍬(151)　ＳＲ13下層から出土した。隅丸三角形状の刃部の上に、幅の狭い逆台形の頭部が取り付く。外面の柄の取り付く部分には隆起が見られる。内面には泥除装着のための蟻溝が見られる。全長26.9cm、残存幅13.0mである。厚さは、隆起部で1.9cm、蟻溝付近で1.6cm、刃部中央では0.9cmである。

用途不明木製品(152・153)　152は残存長29.4cmで、ヘラ状の形態をなす。幅が広くなるにしたがって、厚みも減らしている。153は加工痕のある板材である。幅の広い側に抉り込み状の加工痕がある。鍬などの1次処理材なのかも知れない。

b　中期(154～159)　全てＳＲ13上層から出土したものである。馬形、建築部材、柱材のほか、用途不明の製品がある。

馬形(154)　幅3.8cm、厚さ1.0cmの針葉樹材を板状に加工し、抉り込んで整形している。頭部は幅2.2cmほどにし、鞍部を抉ることによって頚部を表現している。目・鼻などの表現はなく、かなり抽象化されている。背の両面には、貫通しない2ヶ所づつの穴がある。何かを打ち込んでいたものと考えられる。

加工のある杭(155)　非常に硬質の木材である。全長86.4cm、直径3.2cmである。先端部は杭状に加工し、一方の端は球状に丸く作り出している。

用途不明の板状具(156)　硬質の針葉樹材である。残存長65.9cm、最大幅6.0cm、厚さ2.3cmである。図示した上端部は刃先状に削り出す。下方は把手状に見えるが、特別な調整は見られない。

垂木？(157)　湾曲した材である。残存長約124cm、直径2.3cmである。先端部にＬ字形の抉り込みが見られる。

建築部材(158)　残存長145.5cm、残存最大幅

15.9cm、厚さ5.0cmである。片側には組み合わせのための抉り込みが数ヶ所認められる。

柱材（159）　残存長約181cm、直径約10cmの自然木に、若干の調整を施している。上端は二又に分かれているようであるが明瞭ではない。下端から約28cmを残し、他は火を受けている。火を受けていない部分が地中に埋まっていた部分ではないかと考えられる。

4　中世前期の遺物（fig.17）

ＳＤ11とＳＲ14から当該時期のものが出土している。とくに、ＳＤ11出土資料は比較的よくまとまっている。

溝ＳＤ11出土土器(160～177)

土師器皿類、土師器甕、磁器類、陶器椀（山茶椀）、がある。

土師器皿類には、小皿(160)・皿(162・163)のほか、いわゆる「ロクロ土師器」(161)がある。163の形態は、松阪市・曲遺跡[8]などで見られるようなこの地域に特徴的なものである。

磁器類には、小皿(164)・椀(165)があり、共に白磁である。164は広東系で博多分類[9]の平底皿Ⅲ類に相当する。165も広東系と見られ、外面には釉垂れが見られる。博多分類の碗Ⅱ類に相当する。

土師器甕(166)は、南伊勢系系統のもので、南伊勢系成立前のものである。

陶器椀類は、いわゆる「山茶椀」である。尾張産・渥美産のものが見られる。170～172・174～175には灰釉漬け掛けが見られる。また、170・171・175には、口縁部の3方に輪花の表現が見られる。藤澤良祐氏の編年[10]による第3型式を中心とし、一部第4型式に及ぶと考えられる。これらの陶器椀には煤の付着したものが多い。また、全ての椀の内面見込みには、焼成後の研磨が見られる。

河道ＳＲ14出土土器(178～181)

ロクロ土師器小皿(178)、黒色土器椀(179)、陶器椀(180)、土錘(181)がある。溝ＳＤ11とほぼ同じ時期の遺構に、黒色土器等が混入したものと考えられる。

5　中世後期の遺物（fig.17）

井戸ＳＥ８出土土器(182・183)

土師器鍋(182)、磁器椀(183)がある。182は南伊勢系のもので、第3段階a型式[11]に相当する。183は青磁椀で、龍泉窯系のものである。

溝ＳＤ16出土土器(184)

184は南伊勢系の土師器皿で、Ｄ系統小皿[12]に相当する。溝ＳＤ16からは、この他に瀬戸大窯期の擂鉢片が出土している。

土坑ＳＫ５出土土器(185・186)

土師器の小皿がある。ともに南伊勢系のもので、185はＡ系統小皿、186はＢ系統小皿である。

土坑ＳＫ15出土土器(187・188)

187は瀬戸産の天目茶椀である。藤澤良祐氏の編年[13]による大窯第1段階頃のものであろう。188は南伊勢系の鍋で、第4段階c型式に相当する。

土坑ＳＫ３出土土器(189)

189は南伊勢系の鍋で、第4段階c型式に相当する。

溝ＳＤ１出土土器(190～194)

土師器皿と鍋がある。190・191は南伊勢系のもので、Ｂ系統小皿に相当する。192～194は南伊勢系の鍋で、第4段階c型式に相当する。

その他の出土遺物(195～197)

195は、中世前期に相当するロクロ土師器の小皿、196は中世後期かと思われる土師器皿である。197は銭貨で、北宋の元豊通寶である。「豊」と「通」の字の間に、意図的な円孔が穿たれている。このような例は、明和町・斎宮跡土坑ＳＫ3515出土の銭貨[14]にも見られる。

6　近代の遺物

近代の遺物として、井戸ＳＥ17に用いられた井戸枠専用の陶器(198～200)がある。

198・199がこの順序で2段に重ねられ、199の内側に200が据えられていた。198は頚部にタガを模したヘラ描きの文様がある。また、198・199の外面には墨書が見られるが、何が書かれているのかは、残りが良好であるにもかかわらず、分からない。

この土器は、口縁部形態や素地粘土の状況から常滑産と考えられるものである。伊勢では、津市・安濃津遺跡群などで良好な類例が確認されている。安濃津遺跡群における分類[15]の第2期cに相当し、

18世紀末から19世紀前半にかけてのものと考えられる。

註

(1)井藤暁子「近畿」（『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社　1983）

(2)伊藤裕偉「伊勢・伊賀の弥生後期から古墳前期の土器」（『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会　1991）

(3)安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』60－2　1974）

(4)赤塚次郎『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990）

(5)田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981）

(6)山田猛「結語」（『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994）

(7)木製品については、奈良国立文化財研究所編『木器集成図録』近畿原始編(1993)を参照した。

(8)前川嘉宏「曲遺跡」（『県道丹生寺一志線及び県道合ヶ野松坂線道路改良工事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1989）

(9)森本朝子「博多出土貿易陶磁器分類表」（『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅳ　博多　福岡市教育委員会　1984）

(10)藤澤良祐「山茶碗と中世集落」（『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990）ほかを参照

(11)伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1　1990）

(12)伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993）

(13)藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986）

(14)杉谷政樹・大川勝宏・赤岩操「斎宮跡の埋納銭について」（『斎宮歴史博物館研究紀要』5　1996）

(15)伊藤裕偉「近世以降の陶器井戸枠について」（『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997）

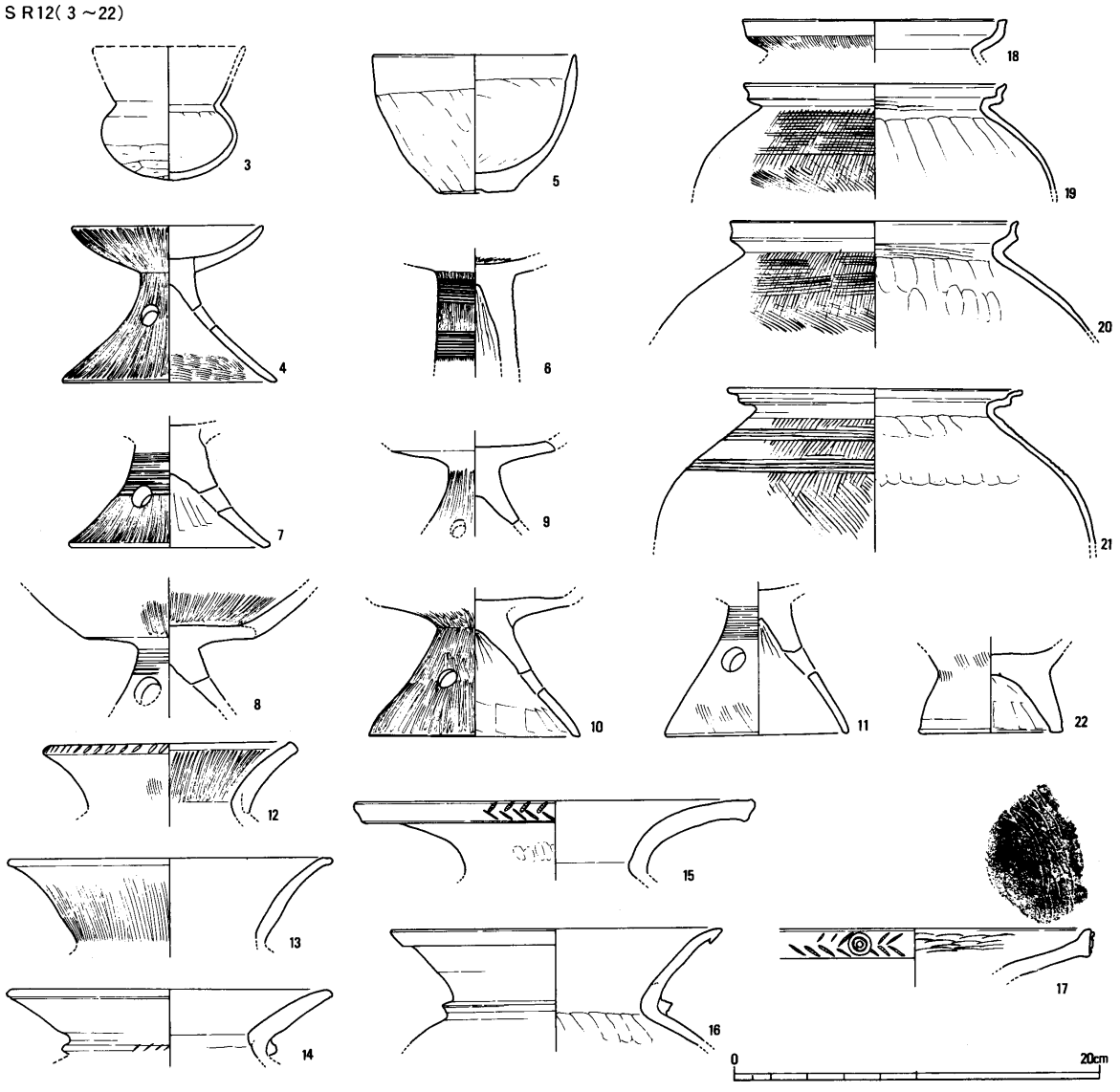


fig.10　河道SR１２出土土器（１：４）

SR13下層(23~57)

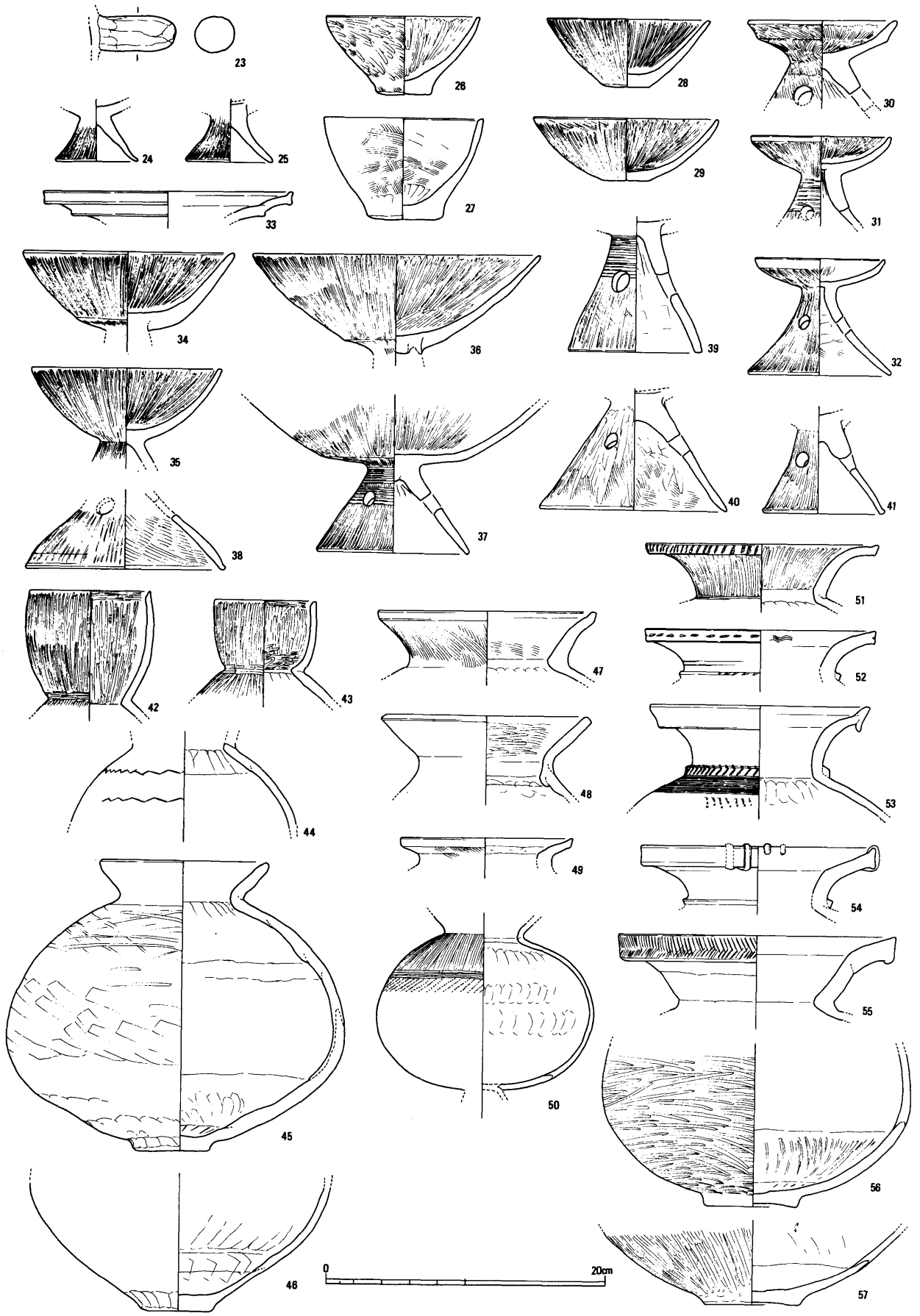


fig.11　河道SR１３下層出土土器(1)　（１：４）

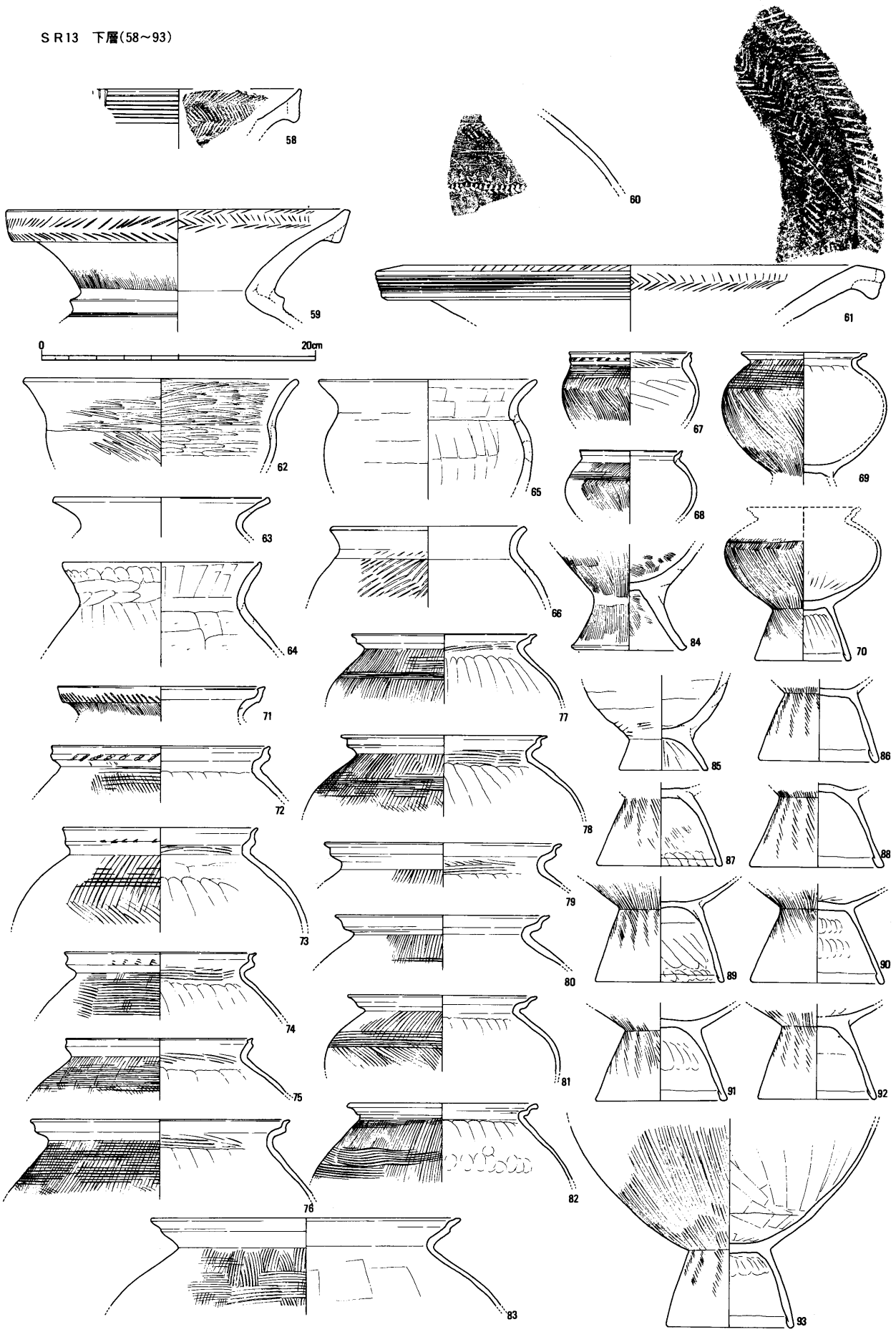


fig.12 河道SR13下層出土土器(2)(1：4)

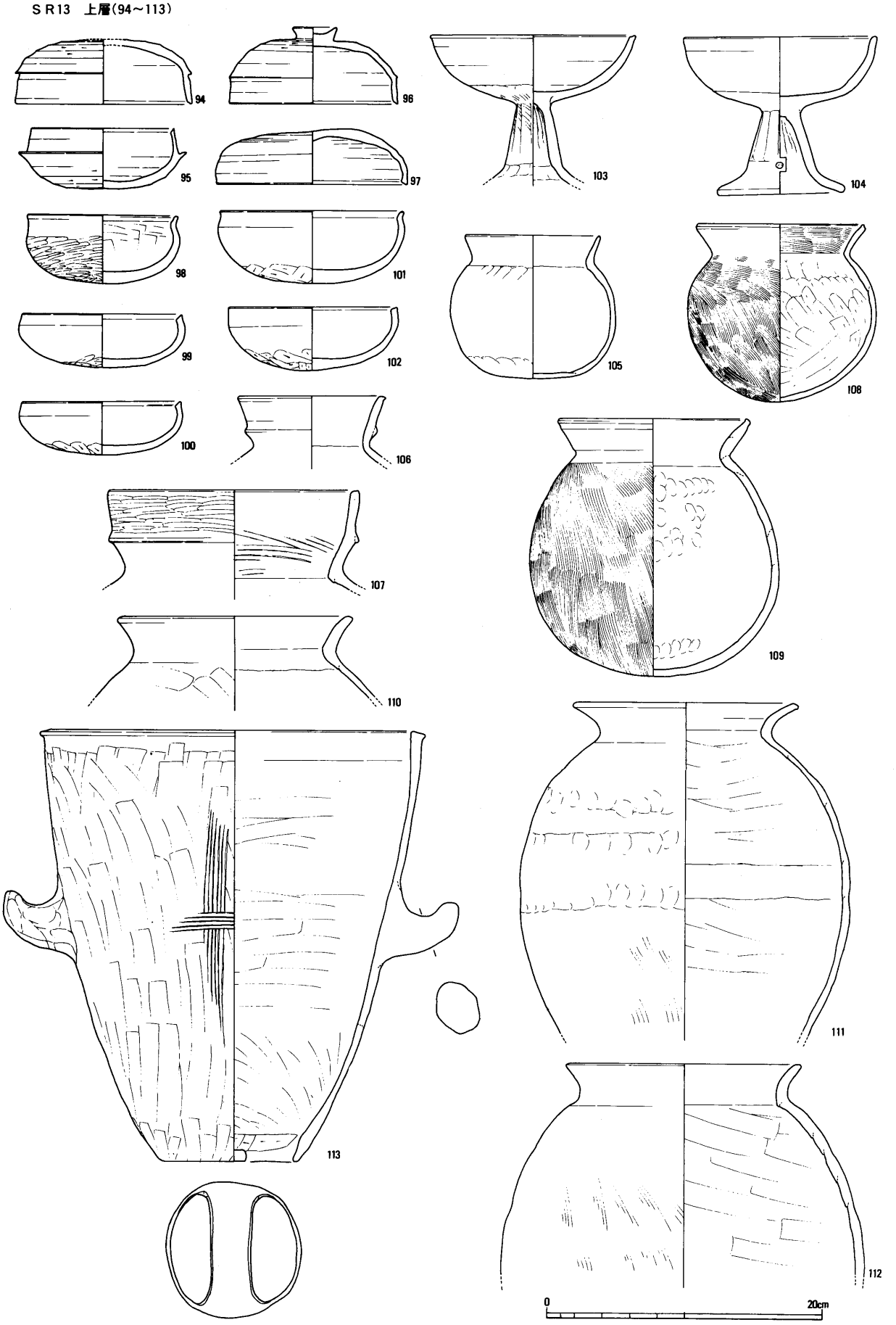


fig.13 河道SR13上層出土土器(1)(1 : 4)

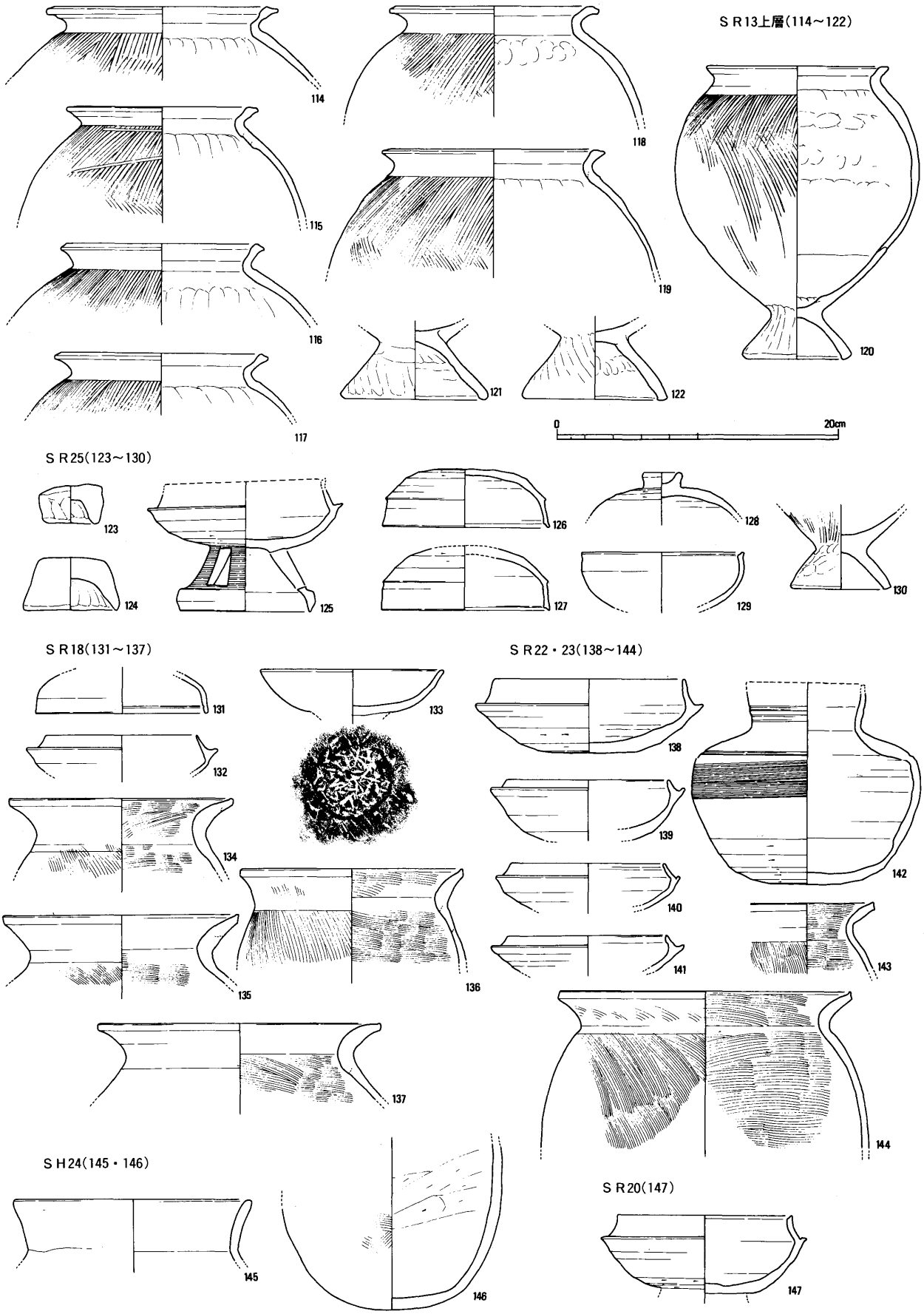


fig.14　河道SR１３上層⑵およびその他の遺構出土土器　（１：４）

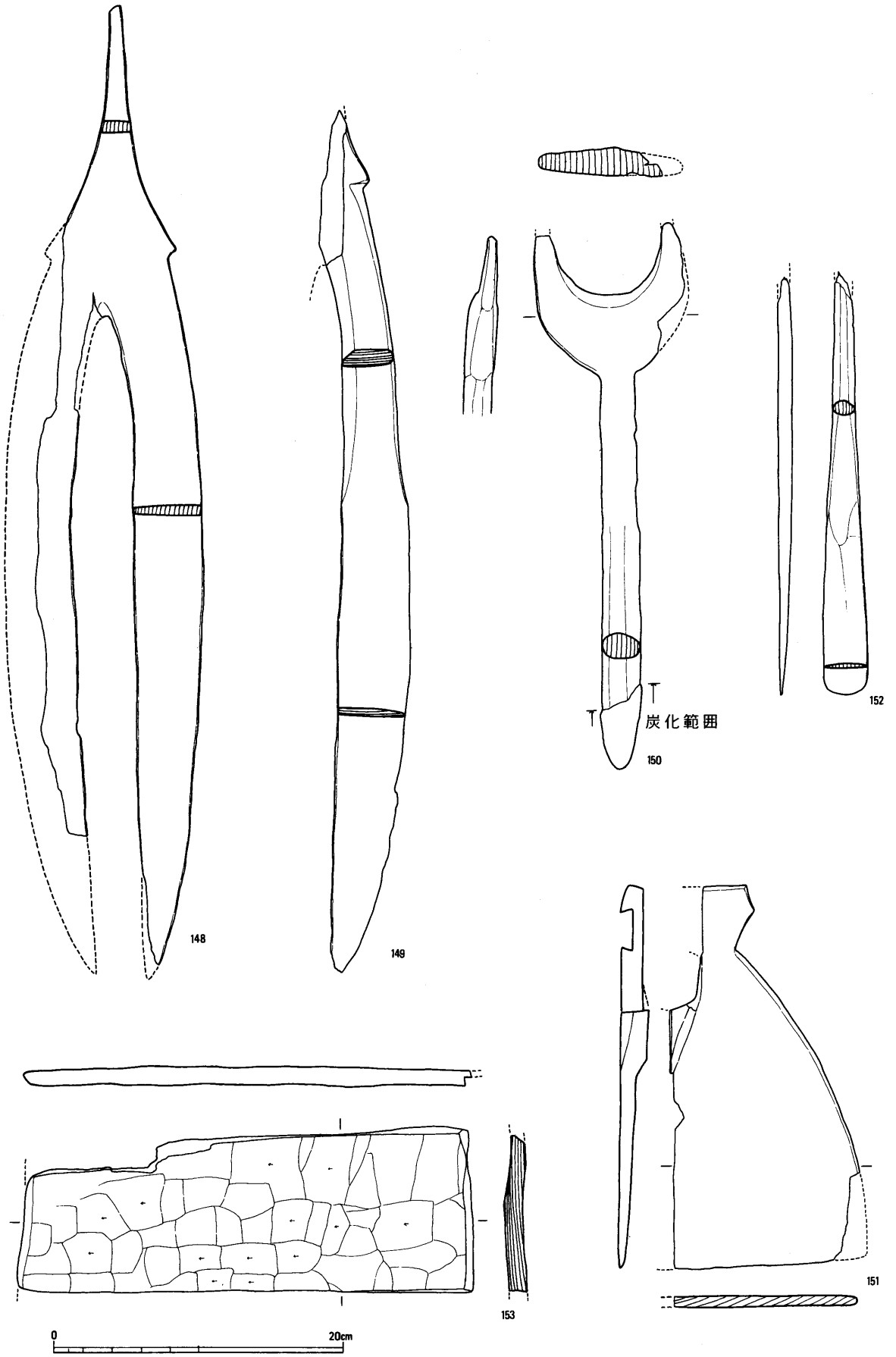


fig.15　河道SR１３下層出土木製品　（１：４）

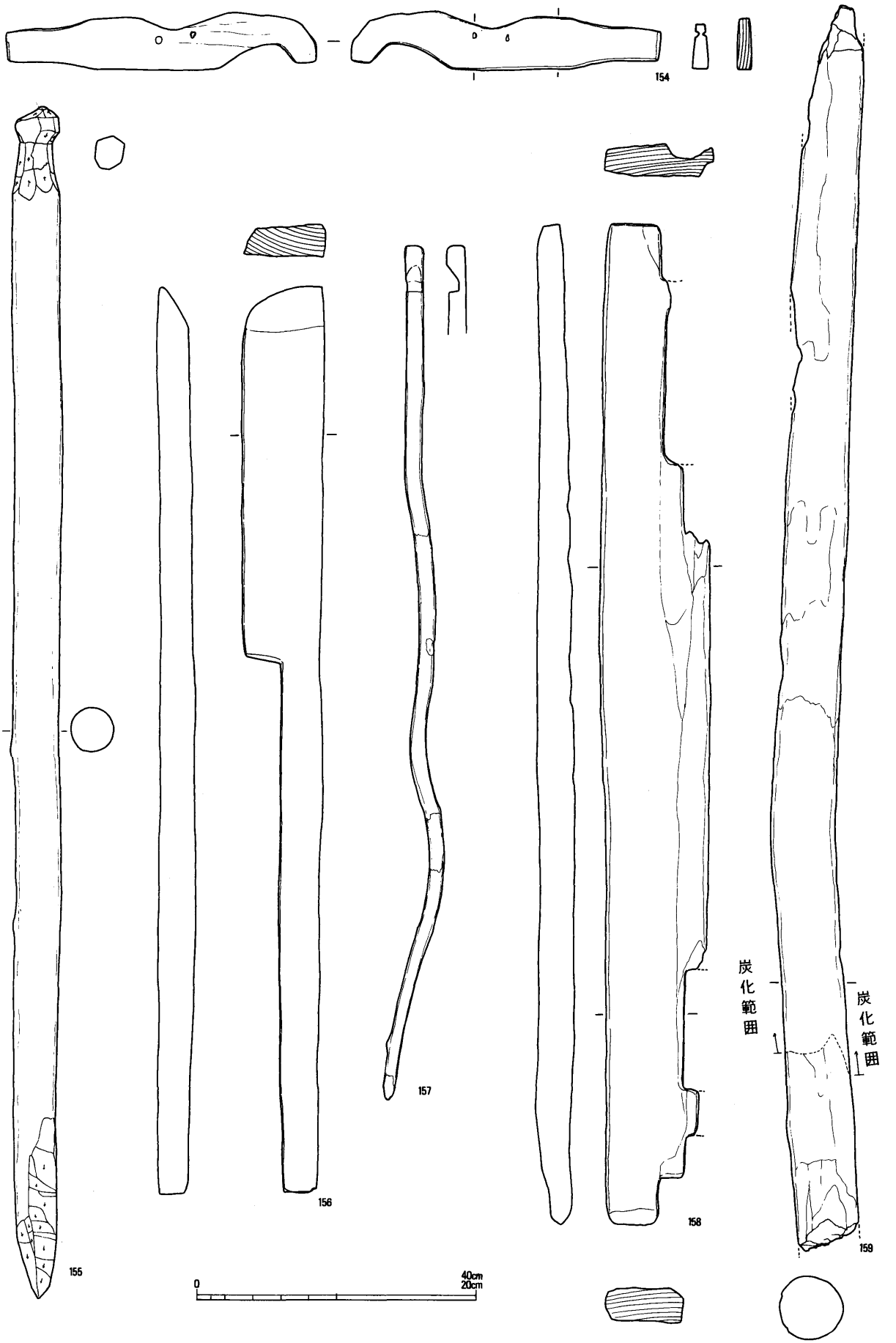


fig.16　河道SR１３上層出土木製品　（154～156は１：４，157～159は１：８）

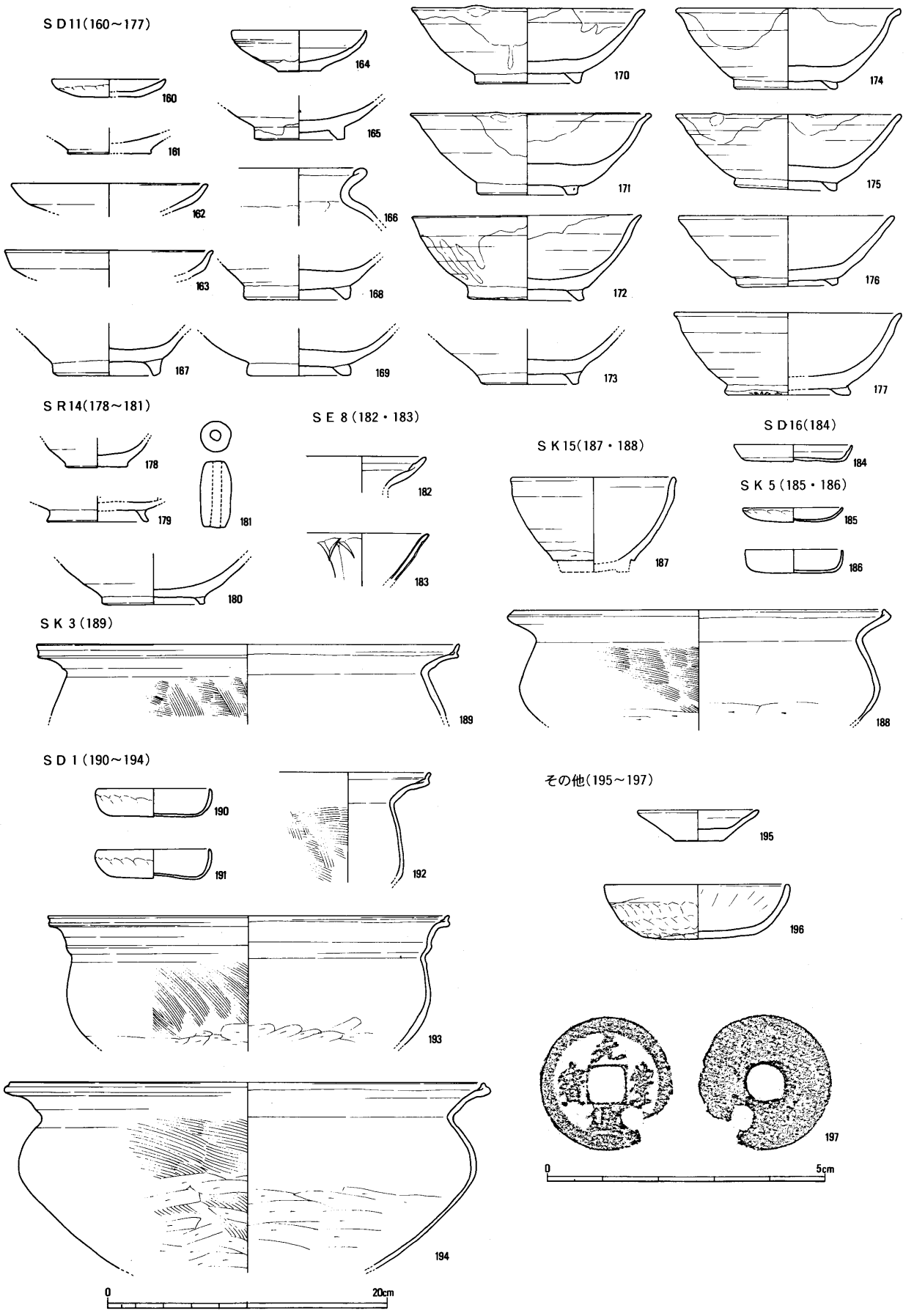


fig.17　出土中世遺物実測図（197は１：１、他は１：４）

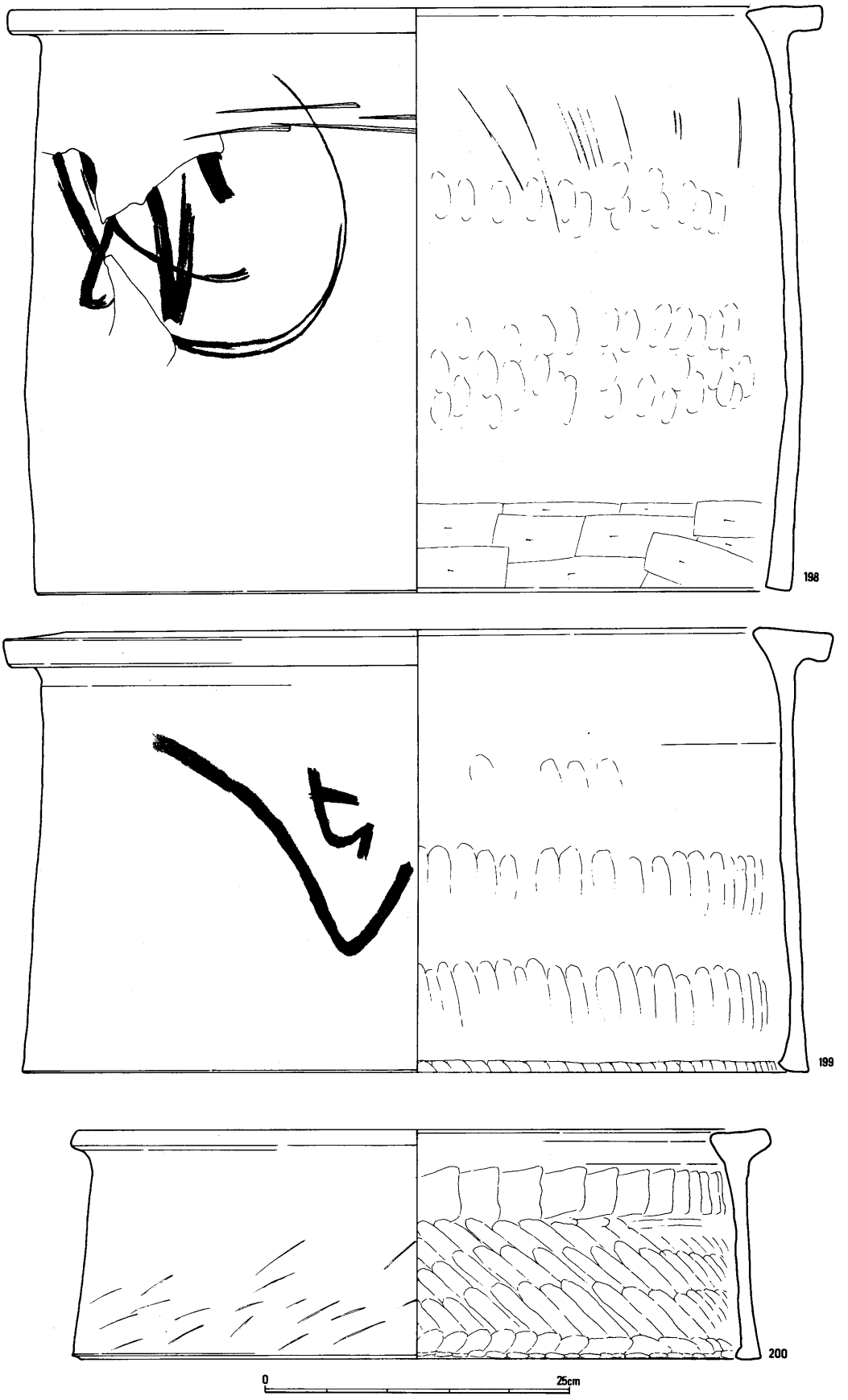


fig.18　井戸SE１７の土器枠（１：５）

番号	実測番号	名称	小地区	遺構・層名など	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1	4404	弥生土器 甕？	c 5	SR13上層	口縁一	外面にキザミ目文・ヘラ描沈線文	粗	明褐灰	口縁部片	
2	101	弥生土器 壺	c 10	検出中	口縁17.8	内面ミガキ？、外面オサエ・ナデ	密	淡橙	口縁1/5	
3	2104	土師器 小形丸底壺	e・f 2	SR12	体7.6	ナデ→ヘラケズリ	密	橙	体部完存	
4	404	土師器 小形器台	b 3	SR12	口縁10.6		密	淡褐	ほぼ完存	
5	403	土師器 小形鉢	c 3	SR12	口縁7.7	ナデ→ヨコナデ	密	淡褐	口縁9/10	
6	2103	弥生土器 高杯	d 2	SR12	脚柱4.4	シボリメ→ヘラミガキ→櫛描横線文	粗	明褐灰	脚柱完存	
7	2004	土師器 高杯	d・e 2	SR12	脚裾11.2	シボリメ→ヘラミガキ→櫛描横線文、3方透かし	粗	灰白	脚裾5/8	
8	2002	土師器 高杯	b・c 3	SR12	脚柱3.4	シボリメ→ヘラミガキ→櫛描横線文、3方透かし	密	暗橙	脚柱完存	
9	2005	土師器 高杯	c 3	SR12	脚柱2.8	シボリメ→ヘラミガキ	密	暗橙	脚柱完存	
10	1602	土師器 高杯	c 3	SR12	脚裾11.8	シボリメ・ヨコナデ・板ナデ→ヘラミガキ	密	淡黄橙	脚裾1/3	
11	2003	土師器 高杯	f 2	SR12	脚裾10.2	ナデ→櫛描横線文、3方透かし	密	橙	脚裾1/2	
12	2304	土師器 広口壺	d・e 2	SR12	口縁14.1	口縁外面に櫛描綾杉状文、内面ヘラミガキ	粗	暗橙	口縁4/5	
13	2302	土師器 広口壺	d 2	SR12	口縁17.8	ハケメ・ナデ	粗	灰白	口縁1/8	
14	2305	土師器 広口壺	b・c 2	SR12	口縁18.0	ナデ、頸部に貼付突帯→キザミ目文	密	淡黄橙	口縁1/4	
15	2303	土師器 広口壺	c・f 2	SR12	口縁22.2	口縁外面に櫛描綾杉状文	密	暗橙	口縁1/10	
16	402	土師器 広口壺	d 2	SR12	口縁18.4	ナデ・ハケメ・貼付突帯→ヨコナデ	密	淡茶灰	口縁1/3	
17	1404	土師器 広口壺	c 3	SR12	口縁一	口縁外面に綾形状文→円形浮文（竹管）口縁内面に二枚貝による連孤文	密	暗黄橙	口縁部片	
18	1603	土師器 壺	d 2	SR12	口縁14.5	ハケメ→ヨコナデ	密	暗黄橙	口縁1/5	外面に煤
19	1506	土師器 台付甕	c 3	SR12	口縁14.5	オサエ・ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1/5	
20	2203	土師器 台付甕	b・c 3	SR12	口縁16.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1/10	
21	401	土師器 台付甕	d 2	SR12	口縁16.4	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	密	淡茶灰	口縁1/4	外面に煤
22	2102	土師器 台付甕	c 3	SR12	脚裾8.0	ハケメ・ナデ	密	暗橙	脚台2/3	
23	2906	土師器 把手	e・f 3	SR13下層	径2.4	ナデ	密	暗橙	把手部完存	器種不明
24	4104	土師器 ミチチュア高杯	b 6	SR13下層	脚裾6.0	ナデ→ヘラミガキ	密	暗橙	脚裾ほぼ完存	
25	4105	土師器 ミチチュア高杯	b 6	SR13下層	脚裾6.2	ナデ→ヘラミガキ	密	褐灰	脚裾2/3	
26	2905	土師器 小形鉢	e・f 3	SR13下層	口縁11.1	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	暗橙	底完存	
27	4207	土師器 小形鉢	e 4	SR13下層	口縁11.5	オサエ・ナデ→粗いハケメ	粗	灰黄橙	底完存	
28	4403	土師器 小形鉢	b 6	SR13下層	口縁11.8	精緻なヘラミガキ	密	暗橙	口縁3/4	
29	2401	土師器 小形鉢	e 3	SR13下層	口縁13.4	全面ヘラミガキ	密	黄褐	完存	
30	1601	土師器 小形器台	e・f 4	SR13下層	口縁10.8	ヘラミガキ、3方透かし	密	暗橙	口縁完存	
31	2903	土師器 小形器台	f 3	SR13下層	口縁10.2	ヨコナデ→ヘラミガキ、3方透かし	密	暗橙	口縁1/3	
32	2403	土師器 小形器台	e 4	SR13下層	口縁9.6	ハケメ・ナデ→ヘラミガキ、3方透かし	粗	暗黄	口縁1/4	
33	2901	土師器 高杯？	d 4	SR13下層	口縁18.0	ヨコナデの後、全面に朱彩	密	淡黄橙	口縁1/6	朱は辰砂か？
34	2402	土師器 高杯	b 6	SR13下層	口縁15.3	全面ヘラミガキ	密	暗黄褐	口縁1/2	
35	4402	土師器 高杯	b 6	SR13下層	口縁13.8	精緻なヘラミガキ	密	暗黄褐	口縁ほぼ完存	
36	4401	土師器 高杯	b 5	SR13下層	口縁21.0	精緻なヘラミガキ	密	暗褐	口縁3/4	
37	2601	土師器 高杯	d 4・5	SR13下層	脚裾11.0	シボリメ・ナデ→ヘラミガキ→櫛描横線文	密	暗黄褐	脚裾5/6	
38	4206	土師器 高杯	f 3・4	SR13下層	脚裾14.2	ナデ→ヘラミガキ・ハケメ	密	暗黄褐	脚裾1/4	
39	4205	土師器 高杯	c 4	SR13下層	脚裾9.8	ハケメ→ヘラミガキ→櫛描横線文・3方透かし	密	暗黄褐	脚裾1/6	
40	2801	土師器 高杯	f 3	SR13下層	脚裾13.6	ハケメ→外面にヘラミガキ・内面にケズリ	粗	暗赤褐	脚裾1/3	3方透かし

tab.1 出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	名称	小地区	遺構・層名など	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
41	2706	土師器 高杯	b 5	SR13下層	脚裾8.9	板ナデ・ヘラミガキ→3方透かし	密	灰黄褐	脚裾1/3	
42	4102	土師器 甕壺	b 6	SR13下層	口縁8.8	ナデ→ヘラミガキ	密	淡黄	口縁1/8	
43	2703	土師器 甕壺	d 4	SR13下層	口縁7.6	ナデ→ヘラミガキ	密	暗橙	口縁ほぼ完存	
44	4304	土師器 甕壺	d 4・5	SR13下層	体一	ヘラミガキ→櫛状具による連続山形文	密	暗橙	体部片	
45	3201	土師器 広口壺	b 6	SR13下層	口縁12.2	ナデ→板ナデ→口縁部にヨコナデ	粗	暗黄橙	体部1/2	
46	3001	土師器 広口壺	b 5	SR13下層	底5.6	オサエ・ナデ→ナデ・板ナデ	粗	暗黄橙	底完存	
47	4002	土師器 広口壺	f 3	SR13下層	口縁15.8	ハケメ・ヨコナデ	密	暗橙	口縁ほぼ完存	
48	3004	土師器 広口壺	b 6・7	SR13下層	口縁15.2	オサエ・ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	粗	暗黄橙	口縁1/4	
49	1204	土師器 壺	e 4	SR13下層	口縁12.4	ナデ・ハケメ→ヨコナデ・一部ケズリ	粗	暗黄橙	口縁1/4	
50	2602	土師器 台付壺	b 6	SR13下層	体15.8	オサエ・ナデ→ハケメ・櫛描直線文・キザミ目文	密	暗黄橙	口縁2/3	
51	2805	土師器 広口壺	d 4	SR13下層	口縁16.9	ヘラミガキ→頸部に沈線・口縁外面にキザミ目文	密	暗黄橙	口縁1/6	
52	3003	土師器 広口壺	b 6	SR13下層	口縁16.7	ナデ→ヘラミガキ→口縁外面と突帯にキザミ目文、口縁内部に紋状文	粗	暗褐	口縁1/6	
53	2501	土師器 広口壺	c 4	SR13下層	口縁16.0	垂下口縁、頸部に貼付突帯・綾杉状のキザミ目文、体部上半に櫛描横線文、キザミ目文	密	暗黄橙	口縁1/3	
54	2803	土師器 広口壺	e・f 3	SR13下層	口縁17.0	ヨコナデ→口縁部に棒状浮文・頸部に突帯	粗	暗黄橙	口縁1/6	
55	4301	土師器 広口壺	c 4	SR13下層	口縁20.2	ナデ→口縁外部に綾杉状文	密	暗黄橙	口縁1/4	
56	4001	土師器 壺	d 3	SR13下層	底6.4	オサエ・ナデ→ヘラミガキ	密	暗黄橙	底完存	内面に米状の付着物
57	1403	土師器 壺	e 3	SR13下層	底7.0	外部にヘラミガキ、内部ナデ・ハケメ	粗	暗黄橙	底完存	
58	3005	土師器 広口壺	d 5	SR13下層	口縁一	口縁外面に擬凹線文→棒状浮文？・口縁家面に綾杉状文→口縁外面に朱彩	密	淡黄灰	口縁部片	
59	3302	土師器 広口壺	b 6	SR13下層	口縁25.2	ハケメ→ヨコナデ→口縁内外に綾杉状文	密	暗黄橙	口縁ほぼ完存	焼成不良
60	2705	土師器 壺	e 3	SR13下層	体一	櫛描横線文・櫛描綾杉状文・静止波状文・刺突文	密	橙	体部片	
61	1303	土師器 広口壺	d 4・5	SR13下層	口縁37.8	口縁内部に櫛描綾杉状文、外面に擬凹線文	粗	橙	口縁1/6	
62	4101	土師器 鉢	b 6	SR13下層	口縁20.2	ナデ→ヘラミガキ	密	暗橙	口縁1/6	外面に煤
63	4005	土師器 甕	c 4	SR13下層	口縁16.0	ヨコナデ	粗	暗橙	口縁1/8	
64	1202	土師器 甕	b 6・7	SR13下層	口縁14.5	ナデ・板ナデ→ヨコナデ・ヘラケズリ	粗	淡黄橙	口縁1/4	
65	1203	土師器 甕	b 6・7	SR13下層	口縁16.1	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1/6	
66	2902	土師器 甕	d 4	SR13下層	口縁14.6	ナデ・タタキ目→ヨコナデ	粗	暗褐	口縁1/4	
67	2904	土師器 台付甕(小形)	d 4	SR13下層	口縁9.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁外面にキザミ目	粗	橙	口縁1/3	
68	3402	土師器 台付甕(小形)	b 6	SR13下層	口縁7.5	オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1/4	内面に炭化物
69	2502	土師器 台付甕	b 6	SR13下層	口縁9.4	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	粗	暗橙	体部完存	
70	1402	土師器 台付甕	b 6	SR13下層	口縁7.2	オサエ→ハケメ	密	暗黄橙	脚台1/2	外面に煤
71	3002	土師器 台付甕	b 6・7	SR13下層	口縁15.4	ハケメ→ヨコナデ→口縁外面にキザミ目文	密	暗黄橙	口縁1/4	
72	2204	土師器 台付甕	e・f 4	SR13下層	口縁16.2	オサエ・ハケメ→ヨコナデ→口縁にキザミ目文	粗	灰白	口縁1/7	
73	4303	土師器 台付甕	e・f 4	SR13下層	口縁14.5	オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁外面にキザミ目文	粗	灰黄褐	口縁1/8	
74	1504	土師器 台付甕	d 5	SR13下層	口縁14.2	オサエ・ハケメ→ヨコナデ→口縁にキザミ目文	粗	灰黄褐	口縁1/6	
75	1503	土師器 台付甕	d 3	SR13下層	口縁14.0	オサエ・ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	口縁1/4	
76	1505	土師器 台付甕	e・f 4	SR13下層	口縁19.0	オサエ・ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄	口縁1/4	
77	1502	土師器 台付甕	d 5	SR13下層	口縁13.5	オサエ・ハケメ→ヨコナデ	粗	黄橙	口縁1/4	
78	4302	土師器 台付甕	c 4	SR13下層	口縁15.2	オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	暗褐	口縁1/5	
79	4004	土師器 台付甕	c 4	SR13下層	口縁17.4	オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄橙	口縁1/10	
80	2202	土師器 台付甕	d 3	SR13下層	口縁16.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰黄	口縁1/5	

tab.2 出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	名称	小地区	遺構・層名など	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
81	4003	土師器 台付甕	b 6	SR13下層	口縁14.0	オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/6	
82	2804	土師器 台付甕	e 3	SR13下層	口縁14.2	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	口縁1/8	外面に煤
83	1501	土師器 台付甕	d 5	SR13下層	口縁23.0	オサエ・ハケメ→ヨコナデ	粗	明褐灰	口縁1/5	
84	2802	土師器 台付甕	d 3	SR13下層	脚裾8.5	ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	脚裾1/5	
85	2702	土師器 台付甕	b 6	SR13下層	脚裾6.5	ナデ→板ナデ・タタキ目	粗	暗橙	脚台1/3	
86	4202	土師器 台付甕	c 4	SR13下層	脚裾9.0	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	明褐灰	脚裾ほぼ完存	
87	2704	土師器 台付甕	b 6	SR13下層	脚裾9.3	オサエ・ナデ→ハケメ	粗	暗褐	脚台完存	
88	4202	土師器 台付甕	b 6	SR13下層	脚裾10.0	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	灰黄褐	脚裾7/8	内面に炭化物
89	2701	土師器 台付甕	d 4	SR13下層	脚裾9.6	オサエ・ナデ→ハケメ	粗	暗黄橙	脚台1/3	
90	4201	土師器 台付甕	b 6	SR13下層	脚裾10.0	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	暗黄橙	脚裾完存	内面に炭化物
91	4203	土師器 台付甕	d 3	SR13下層	脚裾9.8	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	暗黄橙	脚裾完存	
92	4103	土師器 台付甕	c 4	SR13下層	脚裾8.9	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	暗橙	脚裾2/3	
93	3401	土師器 台付甕	d 5	SR13下層	脚裾9.4	オサエ・ナデ→ハケメ・板ナデ	粗	暗黄橙	脚台1/3	
94	302	須恵器 杯蓋	c 4	SR13上層	口縁12.8	回転ナデ→回転ケズリ	密	淡青灰	口縁1/3	
95	3602	須恵器 杯身	d 3	SR13上層	口縁10.4	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	口縁1/8	
96	1902	須恵器 有蓋高杯蓋	b 5	SR13上層	口縁12.4	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	完存	
97	203	須恵器 杯蓋	c 3	SR13上層	口縁14.0	回転ナデ→ヘラ切り	密	青灰	口縁2/3	
98	3804	土師器 小形鉢	b 4	SR13上層	口縁10.9	板ナデ→ヨコナデ→体部にヘラミガキ	密	暗橙	ほぼ完存	
99	301	土師器 小形鉢	b 4	SR13上層	口縁11.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	橙	完存	
100	1903	土師器 小形鉢	b 4	SR13上層	口縁11.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	暗橙	完存	
101	1904	土師器 小形鉢	e 3	SR13上層	口縁13.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	橙	口縁3/4	
102	1702	土師器 小形鉢	b 4	SR13上層	口縁12.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	橙	口縁3/4	
103	102	土師器 高杯		SR13上層	口縁15.0	内面ナデ、外面ハケメ・ナデ	密	淡赤灰	杯部1/3	
104	2001	土師器 高杯	d 3	SR13上層	口縁14.2	ナデ・板ナデ→ヨコナデ	粗	暗橙	完存	脚裾に貫通しない円孔1ヶ所
105	202	土師器 小形壺	b 4	SR13上層	口縁9.9	オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	明橙	口縁2/3	
106	1804	土師器 壺	c 4	SR13上層	口縁10.8	ナデ→ヨコナデ	粗	明橙	口縁1/3	
107	2301	土師器 二重口縁壺	d 3	SR13上層	口縁18.2	ナデ・ハケメ→ヘラミガキ	密	暗橙	口縁1/5	
108	1401	土師器 丸底甕	e 3	SR13上層	口縁12.5	オサエ・ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	密	暗黄橙	口縁1/4	外面に煙
109	3301	土師器 丸底甕	c 5	SR13上層	口縁13.5	オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	体部2/3	
110	3701	土師器 壺	b 7	SR13上層	口縁17.1	ナデ・板ナデ→ヨコナデ	密	暗橙	口縁1/4	
111	1701	土師器 長胴甕	b 4・5	SR13上層	口縁16.4	ナデ・板ナデ→ヨコナデ	粗	暗橙	口縁1/3	
112	3502	土師器 長胴甕	c 4	SR13上層	口縁17.2	ナデ・板ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/3	外面に煙
113	3101	土師器 瓶	e 3	SR13上層	口縁28.2	ナデ→口縁部にヨコナデ→ケズリ状の板ナデ→ハケメ→外面に「＋」字形施文？	密	暗黄橙	ほぼ完存	底は「I」字形にケズリ出す
114	1801	土師器 台付甕	e 4	SR13上層	口縁16.4	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	淡黄橙	口縁1/3	
115	1802	土師器 台付甕	d 4	SR13上層	口縁13.8	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	暗黄橙	口縁3/8	体部上半に沈線状ナデ
116	2201	土師器 台付甕	d 3	SR13上層	口縁14.4	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	暗黄橙	口縁1/4	
117	1803	土師器 台付甕	c 4	SR13上層	口縁15.3	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	淡黄橙	口縁1/3	
118	1901	土師器 台付甕	e 3	SR13上層	口縁15.0	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	淡黄橙	口縁1/4	
119	3501	土師器 台付甕	d 3	SR13上層	口縁16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	暗黄橙	口縁1/2	
120	201	土師器 台付甕	d 3	SR13上層	口縁13.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	淡褐	口縁1/3	

tab.3 出土遺物観察表(3)

番号	実測番号	名称	小地区	遺構・層名など	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
121	2101	土師器 台付甕		SR13上層	脚裾10.8	オサエ・ナデ	密	灰白	脚台完存	
122	1703	土師器 台付甕	b4・5	SR13上層	脚裾10.2	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	暗橙	脚台完存	外面に煤
123	3707	土師質 焼台?	b13	SR25	裾4.3	オサエ・ナデ	粗	暗黄橙	完存	2次的な被熱
124	3706	土師質 焼台?	b13	SR25	裾7.0	内面オサエ・外面型押しの痕跡	粗	暗黄橙	完存	2次的な被熱
125	3601	須恵器 有蓋高杯	b12	SR25	脚裾9.9	回転ナデ→カキメ→3方透かし	密	灰	脚台完存	
126	3603	須恵器 杯蓋	a・b13	SR25	口縁12.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	暗灰	口縁1/5	
127	3604	須恵器 杯蓋	a・b13	SR25	口縁12.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	口縁1/10	
128	3606	須恵器 有蓋高杯	c12	SR25	摘径2.9	回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ	密	灰白	脚部完存	
129	3605	土師器 小形鉢	b13	SR25	口縁11.6	ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/3	
130	3705	土師器 台付甕	b12	SR25	脚裾7.2	ナデ→ハケメ	密	淡黄橙	脚台完存	
131	1205	須恵器 杯蓋	b10	SR18	口縁12.4	回転ナデ	粗	灰	口縁1/6	焼成不良
132	1302	須恵器 杯身	d10	SR18	口縁10.8	回転ナデ	密	灰	口縁1/10	
133	1201	土師器 高杯	e9	SR18	口縁13.0	ナデ 脚柱接合部にヘラ状具によるキザミ	粗	淡黄橙	杯部1/2	
134	1103	土師器 甕	d10	SR18	口縁16.0	ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	口縁1/8	
135	1104	土師器 甕	d10	SR18	口縁17.0	ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	口縁1/6	
136	1102	土師器 甕	b10	SR18	口縁16.0	ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	口縁1/4	
137	1101	土師器 甕	e9	SR18	口縁20.2	ハケメ→ヨコナデ	粗	暗黄橙	口縁1/4	
138	3903	須恵器 杯身	d11	SR22・23	口縁13.8	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	口縁1/3	
139	3906	須恵器 杯身	b10	SR22	口縁11.8	回転ナデ	密	灰	口縁1/8	
140	3905	須恵器 杯身	c・d10	SR22・23	口縁11.2	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	口縁1/6	
141	3904	須恵器 杯身	b11	SR23	口縁11.6	回転ナデ	密	灰黄	口縁1/8	
142	103	須恵器 壺	b10	SR22	体16.3	回転ナデ→外面にカキメ・回転ケズリ	密	暗灰	体部2/5	
143	3901	土師器 甕	b10	SR22	口縁一	ハケメ→ヨコナデ	密	暗橙	口縁部片	
144	3801	土師器 甕	b10	SR22	口縁21.0	ハケメ→ヨコナデ	密	暗橙	口縁1/4	
145	3702	土師器 甕	d11	SH25	口縁17.2	ヨコナデ	密	暗橙	口縁1/5	
146	3703	土師器 甕	d11	SH25 カマド	体部一	ナデ・ハケメ・ヘラケズリ	粗	暗橙	体部下半完存	
147	1301	須恵器 有蓋高杯	e8	SR20	口縁12.6	回転ナデ→回転ケズリ→脚台付加	粗	灰白	5/8	
160	706	土師器 小皿	b6	SD11	口縁8.3	オサエ・ナデ	密	暗橙	口縁1/2	
161	705	ロクロ土師器 皿	c5	SD11	底6.1	ロクロナデ→糸切り	密	淡褐	底1/3	
162	708	土師器 皿	f7	SD11	口縁14.1	ナデ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁1/4	
163	707	土師器 皿	c5	SD11	口縁15.0	ナデ→ヨコナデ	密	暗黄橙	口縁1/10	
164	506	白磁 小皿	d5	SD11	口縁9.8	クロナデ→ケズリ→施釉	密	釉:淡白	底完存	
165	505	白磁 椀	e6	SD11	高台6.7	ケズリ出し高台、施釉	密	釉:淡緑白	高台完存	
166	605	土師器 甕	c5	SD11	口縁一	ナデ→ヨコナデ	密	暗橙	口縁部片	
167	703	陶器 椀	f7	SD11 p1	高台7.7	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ	密	灰白	高台完存	知多 内部研磨 墨痕
168	604	陶器 椀	b6	SD11 p7	高台7.8	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ	密	灰白	高台完存	渥美
169	701	陶器 椀	f7	SD11 p2	高台7.5	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ	密	灰白	高台完存	渥美?内面研磨
170	603	陶器 椀	e7	SD11 p3	口縁16.5	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ →漬掛灰釉	密	灰白	完存	渥美 内面研磨 輪花
171	601	陶器 椀	d5	SD11 p6	口縁17.4	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ →漬掛灰釉	密	白灰	口縁1/2	渥美 内面研磨 輪花
172	501	陶器 椀	e6	SD11	口縁16.6	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ →漬掛灰釉	密	淡灰	ほぼ完存	渥美 内面研磨

tab.4 出土遺物観察表(4)

番号	実測番号	名称	小地区	遺構・層名など	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
173	702	陶器 椀	a 6	SD11	高台7.5	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ	密	灰白	高台完存	渥美 内面研磨
174	503	陶器 椀	e 6	SD11	口縁16.4	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ→漬掛灰釉	密	白灰	口縁2/3	渥美
175	502	陶器 椀	e 6	SD11	口縁16.4	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ→漬掛灰釉	密	白灰	口縁4/5	渥美 内面研磨 輪花
176	602	陶器 椀	e 6	SD11 p4	口縁15.8	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ	密	灰白	完存	知多
177	504	陶器 椀	a 6	SD11	口縁16.6	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ	密	白灰	口縁1/3	渥美
178	907	ロクロ土師器 小皿	e 4	SR14	底4.6	ロクロナデ→糸切り	密	暗黄橙	底完存	
179	908	黒色土器 椀	e 4	SR14	高台7.4	ナデ・貼付ナデ	密	黒・暗黄	高台1/4	
180	906	陶器 椀	e 4	SR14	高台7.5	ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ	密	灰白	高台1/3	
181	1003	土錘	b 5	SR14	長4.9	ナデ	密	灰白	完存	重さ23.0g
182	804	土師器 鍋	e 14	SE8	口縁一	ヨコナデ	密	暗黄橙	口縁部片	外面に煤
183	1002	青磁 椀	e 14	SE8	口縁一	外面に陰刻蓮弁文	密	釉：緑灰	口縁部片	龍泉窯系
184	902	土師器 小皿	d・e 7	SD16	口縁8.7	オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁3/4	
185	904	土師器 小皿	e 12	SK5	口縁7.4	オサエ・ナデ	密	淡黄橙	完存	
186	903	土師器 小皿	e 12	SK5	口縁7.1	オサエ・ナデ	密	淡黄橙	口縁1/3	
187	1001	陶器 天目茶椀	b 8	SK15	口縁12.0	ロクロナデ→ロクロケズシ→施釉	密	釉：暗赤	口縁1/8	
188	801	土師器 鍋	b 8	SK15	口縁27.8	ナデ・ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	密	褐灰	口縁1/5	外面に煤
189	803	土師器 鍋	a 13	SK3	口縁30.5	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	密	暗黄橙	口縁1/8	外面に煤
190	905	土師器 小皿	e 15	SD1	口縁8.2	オサエ・ナデ	密	淡黄橙	口縁3/4	
191	901	土師器 小皿	e 15	SD1	口縁8.1	オサエ・ナデ	密	淡黄橙	完存	
192	3902	土師器 鍋	e 15	SD1	口縁一	ナデ・ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁部片	
193	802	土師器 鍋	f 15	SD1	口縁29.0	ナデ・ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	密	淡黄橙	口縁1/6	外面に煤
194	3802	土師器 鍋	f 15	SD1	口縁35.0	ナデ・ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	密	灰白	口縁1/8	外面に煤
195	704	ロクロ土師器 小皿	c 14	検出中	口縁8.7	ロクロナデ→糸切り	密	淡褐	底完存	
196	3803	土師器 皿	d 12	黄灰砂	口縁13.4	ナデ・板ナデ→ヨコナデ	密	淡黄橙	口縁3/4	
197	1004	銭貨(元豊通寶)	b 11	pit2		「豊」と「通」字間に円孔	—	—	完存	
198	4501	陶器 井戸枠	e 4	SE17	口縁66.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ・内面下部にケズリ→頸部に施文	密	暗赤褐	底2/3	外面に墨書、読めず
199	4601	陶器 井戸枠	e 4	SE17	口縁68.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	橙	完存	外面に墨書、読めず
200	4701	陶器 井戸枠	e 4	SE17	口縁58.1	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	橙	完存	

tab.5 出土遺物観察表(5)

番号	実測番号	名称	小地区	遺構・層名など	法量(cm)	製作時の特徴など	使用材	特記事項
148	No.12	曲柄又鍬	d 4	SR13下層	残長67.2		コナラ属アカガシ亜属	
149	No.11	曲柄又鍬	c 4	SR13下層	残長60.4	全体の半分弱	コナラ属アカガシ亜属	
150	No.4	柄	b 6	SR13下層	残存長38.3	柄の束は欠損、残存部の先端は焼ける	コナラ属アカガシ亜属	
151	No.9	直柄広鍬	e 3	SR13下層	残存長26.9	約半分の残存、蟻溝	コナラ属アカガシ亜属	
152	NO.6	用途不明	d 4	SR13下層	残存長30.0	ヘラ状	コナラ属アカガシ亜属	
153	No.5	用途不明	b 6・7	SR13下層	残存長31.2	鍬などの未製品か？	ヒノキ	
154	No.10	馬形	b 4	SR13下層	長22.3	体部両面にホゾ穴？あり	ヒノキ	
155	No.2	加工杭	e 2	SR13上層	長86.1	下端は杭状、上端は丸く加工する	ヒノキ	
156	No.3	板状具	e 3	SR13上層	長65.8	先端を斜めに切る	スギ	
157	No.1	垂木？	d 3	SR13上層	残存長133.2	先端欠損、一方先端には抉り込み	ヒノキ	
158	No.7	建築部材	b 4	SR13上層	残存長145.5	板材、各所にホゾ穴あり	モミ属	
159	No.8	柱材	e 3	SR13上層	残存長181.3	先端の約28cm以外は炭化		

tab.6 出土木製品観察表　　※樹種同定は環境考古学研究所の金原正明氏による

V　まとめと課題

今回の調査では、古墳時代、平安時代末期、室町～戦国時代、および近世の遺構が確認された。また、遺物には、弥生時代前期のものも見られた。

ここでは、今回の調査で確認できたこと、および、新たに生じた問題点などを記述し、まとめに代えたい。

1　弥生前期の遺物について

遺構は確認されていないが、壷と甕が1点づつ出土している。破片なので確定的なことは言えないが、少なくともいわゆる亜流遠賀川式ではなく、前期でも中段階以前に相当する(1)ものである。

この付近では、宮ノ腰遺跡の下流約3kmに位置する中ノ庄遺跡から当該時期の遺物が多く出土している(2)。宮ノ腰遺跡はそれよりも上流に位置するため、少なくとも当地に2遺跡以上の弥生前期遺跡が存在することが確実となった。出土土器の磨滅はそれほど激しくないことから、宮ノ腰遺跡よりも上流、今の上ノ庄集落付近に、当該時期の遺跡が存在するものと考えられる。

2　古墳時代の遺構について

今回の調査区からは、古墳時代前期から後期にかけての数条の河道跡が確認された。また、後期の河道跡の下からは、カマドを有した竪穴住居が確認された。

前期の河道ＳＲ12・ＳＲ13下層は、規模が大きい。とくにＳＲ13下層は河幅9mほどもある。現在、当遺跡付近を流れる河川も、圃場整備以前の河幅はこの程度のものが多い。位置的に見て、岩内川の旧流路に相当すると考えるのが妥当であろう。

竪穴住居跡は、調査区内では1棟しか確認できなかった。地形的に見て、河道方向と同一の南北方向に、数棟が存在する程度の集落跡であったものと考えられる。河道の近隣に営まれていることから、小規模な自然堤防を利用して営まれた集落と見ることができようか。

竪穴住居内からの出土遺物は少なく、時期の特定は困難であるが、後期の河道がこの遺構を切っていることと、前期にカマドを有した竪穴住居の確認例が今のところ三重県下でないことを考慮すれば、中期の範疇で捉えるべきであろう。中期の竪穴住居とすれば、ＳＲ13上層とＳＲ25とに挟まれた、極めて狭隘な場に営まれた住居ということとなり、興味深い。

また、ＳＲ13上層からは馬形木製品が、下層からはミニチュア土器が出土している。時期こそ異なるが、ともに祭祀関連の遺物と把握することが可能であるため、河川における祭祀が継続的に行われていた可能性が想定される点も興味が持たれる。

3　古墳時代前期の遺物について

ＳＲ12およびＳＲ13下層からは、古墳時代前期の土器・木製品が数多く出土している。

土器　いわゆるＳ字状口縁台付甕（以下、「Ｓ字甕」と呼称）の古い段階のものがある。赤塚次郎氏がいうＡ類のもの(3)が比較的多く見られる。伊勢でこれらの土器が一定量まとまって出土している遺跡は少なく、松阪市粥鍋遺跡(4)程度である。

Ｓ字甕の形態や調整手法さらには胎土については、今後科学分析をも含めた検討を要する問題ではあるものの、肉眼観察した限りにおいて、尾張地域などで出土する典型的なものとされているものに極めて近いように思われる。このような、土器の類似という現象の背景にある問題も、今後追求しなければならない重要な課題である。

出土した土器のうち小形器台には、尾張などの東海地域で見られる形態に類似したもの（fig.11—30）もあるが、伊賀以西の近畿地域で見られる形態に近いもの（fig.11—31・32など）の方が量としては多い。土器の製作手法は近畿地方との関連を直接窺えないものの、東海・近畿地域との接続点としてのあり方を示すものとして評価できよう。これは、後述する木製品のあり方も含め、東海地域といえども決して一円的な地域圏ではないことを示すものと考えられる。

木製品　出土した木製品のうち、曲柄又鍬に注目したい。この形態の曲柄又鍬は、樋上昇氏によれば、近畿地域を中心として分布するものであり、伊勢湾沿岸部の東海地域に見られる形態とは若干異なっているものである(5)。しかし、この形態の又鍬は嬉野町堀田遺跡(6)や同町片部遺跡(7)からも出土しているようであり、伊勢中部、あるいはさらに限定して旧一志郡平野部では、一定程度の分布を持つ可能性が考えられる。

このことと、樋上氏が提示された研究成果とを関連させると、どのようなことが考えられるであろうか。まず、東海地域という大地域の中における中伊勢という小地域の評価が、今後極めて重要になることを示唆するものと考えることができる。伊勢の木製農具は報告例が少なく、今後、意識的に抽出していく必要があるが、当遺跡出土の又鍬は、東海地域における小地域としての伊勢をより積極的に考えていく必要があることを如実に物語っているのではなかろうか。

4　古墳時代中後期の遺物について

古墳時代中後期の遺物は、河道ＳＲ13上層を中心にいくつか確認されている。

土器類では、Ｓ字甕の最終形態に近い台付甕とともに、長胴甕や丸底甕がいくつか確認された。共伴する須恵器は、田辺昭三氏による陶邑編年(8)のＴＫ47型式を中心としたものであることから、おおよそ５世紀末～６世紀初頭頃に位置付けられる。

Ｓ字甕を中心とした台付甕の終焉頃に出現する長胴甕は、Ｓ字甕とは手法的にも明らかに異なるものであることは、今回の調査で出土した両者を比較してもわかる。したがって、カマドの普及と大いに関連すると考えられる長胴甕は、それまでのＳ字甕で培われた技術を踏襲することなく製作されていると考えられる。しかし、今回の調査で出土した甑(113)の外面に見られる「十」字形の施文？は、Ｓ字甕の外面に施されるハケメと基本的に同じ工具を用いていると考えられる。長胴甕との関連が深いと考えられる甑にＳ字甕の要素が一部見られることは興味深く、カマド導入期にＳ字甕を製作していた工人がどのような動きをしていたのかえを考えるうえでの一情報となろう。

木製品類では馬形の出土が注目できる。馬形木製品は、三重県内では六大Ａ遺跡での出土が確認されている(9)に止まる。何らかの祭祀行為に伴うものであると考えられる。７世紀以降の遺跡でしばしば確認される馬形土製品との関連を考慮するべき遺物かと考えられる。

5　中世の遺構について

今回確認できた中世の遺構は、当時この付近に存在していた曽祢庄の一角と考えることができる。おそらく、古墳時代以来形成され続けていた微高地上に、点々と集落が形成されていたのであろう。

中世遺跡を荘園との関係で考察する方向は、近年ようやくなされつつあるが、伊勢では未だ手つかずの状態である。今後、意識的に調査されなければならない。

6　小結

以上、いくつかの項目について述べてきた。このなかで、今回とくに注目したいのは、弥生時代前期と古墳時代前期の遺物である。これらの遺物には、東海地域の一角を占める伊勢のなかにあって、やや近畿的あるいは西日本的な様相が見て取れるという点である。

これまで、任意の文化の流れがどのような動きを見せるかについては、陸路を用いた動きが重視されてきている。しかし、海路による文化伝達を考える方が理に適っている場合が多く見られる。

例えば、志摩半島の海岸寄り丘陵上に立地するおじょか古墳（志摩郡阿児町）は、当地域では異質な板石積の横穴式石室を持つ古墳(10)であり、北部九州系の直接的な影響を見ることができる。また、津市六大Ａ遺跡に見られる組紐文や火炎透かしを有した初現的な須恵器・韓式系土器(11)についても、近畿地方に波及した文化の２次的な拡散というよりは、より直接的に当地へと至ったと考えられるような状態を示している。さらに、古墳時代前期の伊勢で特徴的に見られる二重口縁壺（壺形埴輪）の形態は、太平洋沿岸部には見られないものの、遠く北関東の元島名将軍塚古墳（群馬県高崎市）に見ることがで

きる(12)。

このような事例は、とくに海路による文化伝播を特徴的に示すものと考えられる。ここで、改めて当遺跡の弥生前期の土器、あるいは古墳時代前期の遺物を見てみたい。これまで、主に陸路による文化伝播が考えられてきた（あるいは海路による文化伝播を考慮しなかった）ものについても、海路による文化伝播の現象として把握できはしないだろうか。弥生前期における稲作についても、元来伝達した媒体は、まさに海路によって大陸から伝達したものである。同様なことは須恵器についても言える。本来、海路によってのみ伝達可能なものを、日本列島に至った途端、陸路のみの伝達を考えること自体不自然である。勿論、一度たどり着いた場所からの２次的な拡散はあるに違いない。しかし、西から伝播して近畿地方などに至った文化が海路経由であるならば、そこからさらに東へと向かう文化の経路として海路を用いないという理由はない。

さて、伊勢には安濃津という港がある。中世末期に中国で「日本三津」のひとつに数えられているこの港は、機能的には弥生時代以前にその原形があったと見られる(13)。また、宮ノ腰遺跡が存在する三渡川流域についても、その河口付近は江戸時代まで大きな入り海となっていたことが知られる。安濃津といい三渡川河口部といい、天然の良港を有した地域であると考えることができるのである。

上述してきたような文化伝播を海路によるものと考えるとき、伊勢という地域が列島東西の結節点であり、数々の良港を後に輩出するという現象が、どこかで一本の糸につながるのではないだろうか。宮ノ腰遺跡に見られた又鍬のあり方もまた、そのような現象のひとつと考えることもできるのではないだろうか。海と農耕は、必ずしも別物ではないこと、そして、伊勢という地域が海を媒介とした文化の到達点にあることを考察するうえで、この遺跡から確認された考古資料は重要な意味を持つのではないかと考える。

註

(1)鈴木克彦「「亜流遠賀川式土器」再考」（『Miehistory』vol.2　1992）

(2)谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1972）

(3)赤塚次郎「廻間式土器」「土器・土器群の形成」（『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990）

(4)前川嘉宏『粥鍋遺跡発掘調査報告』（松阪市教育委員会　1987）

(5)樋上昇「木製農耕具の地域色とその変遷～勝川遺跡出土資料を中心として～」（『（財）愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和63年度　1989）および同氏「木製農耕具研究の一視点～ナスビ形農耕具の出現から消滅まで～」（『考古学フォーラム』3　1993）

(6)平成７年度三重県埋蔵文化財センター調査遺跡

(7)和気清章氏（嬉野町教育委員会）の御教示による。

(8)田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981）

(9)平成７年度三重県埋蔵文化財センター調査

(10)小玉道明ほか『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』（鳥羽市教育委員会　1968）

(11)穂積裕昌ほか「六大Ａ遺跡」（『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅶ　三重県埋蔵文化財センター　1995）

(12)伊藤裕偉「古墳時代前期における土器製作技法の検討～伊勢地域における事例を通して～」（『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991）

(13)伊藤裕偉ほか『安濃津』（三重県埋蔵文化財センター　1997）を参照されたい。

報告書抄録

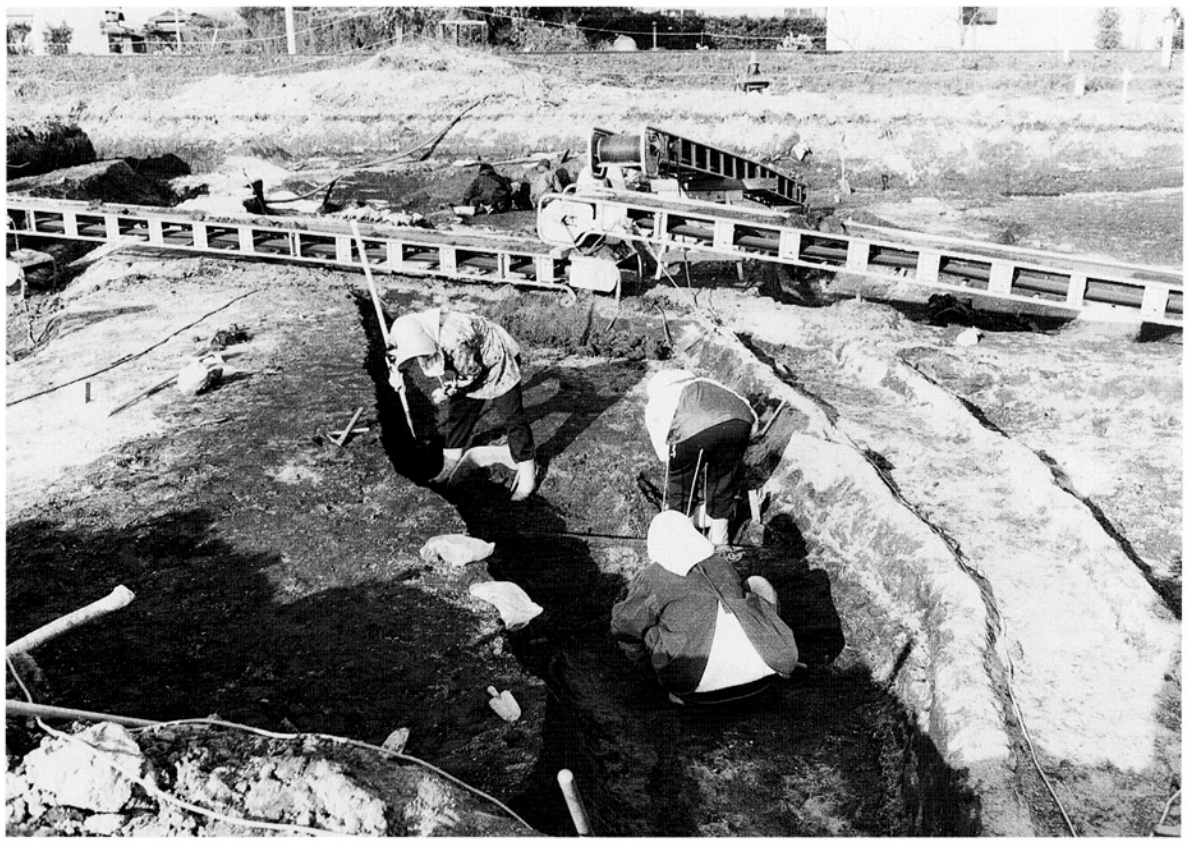
ふりがな	みやのこしいせきはっくつちょうさほうこく1
書名	宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ
副書名	～一志郡三雲町上ノ庄所在遺跡の調査～
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１５３
編著者名	伊藤裕偉
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL05965(2)7031
発行年月日	西暦　１９９６年　３月　３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
宮ノ腰遺跡 (みやのこしいせき)	三重県一志郡 (みえけんいちしぐん) 三雲町上ノ庄 (みくもちょうかみのしょう) 字宮ノ腰 (あざみやのこし)	244074	15	34° 35′ 43″	136° 30′ 13″	1996.10.29 ～ 1996.12.20	１，６００	平成８年度県道松阪久居線緊急地方道路整備事業に伴う緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ腰遺跡	集落跡	弥生前期		壺・甕	
		古墳前期	河道	土師器・木製農耕具類	「ナスビ形鋤」
		古墳中後期	河道・竪穴住居	土師器・須恵器 建築部材・馬形木製品	
		中世前期	溝・河道	陶器・貿易陶磁器	
		中世後期	ピット・溝・井戸	土師器・陶器	
		近代	井戸	常滑産井戸枠	

調査区全景ほか

全景（北西から）



調査風景（ＳＲ１３）

PL. 2

河道SR13 (1)

全景（北から）

南壁土土層（北から）

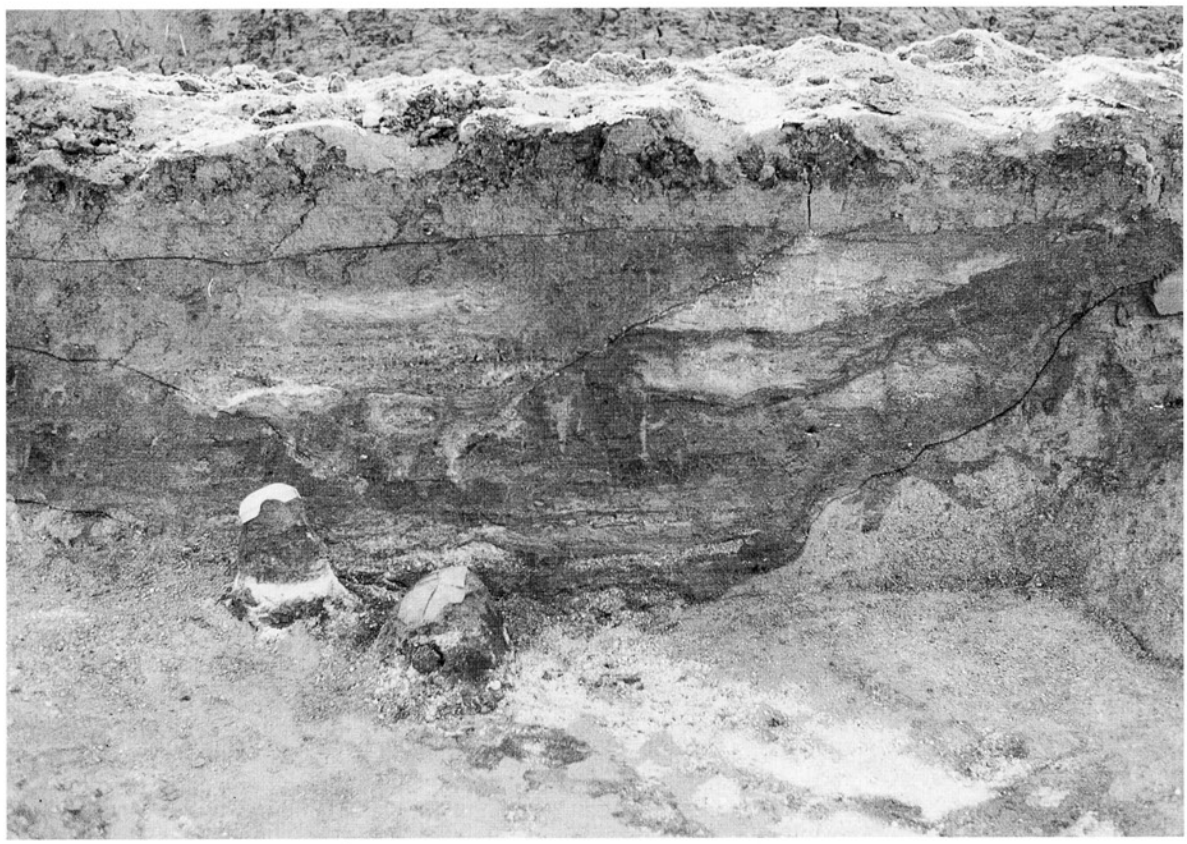
上層遺物出土状況（南から）

甑（113）・甕（108）および柱材（159）

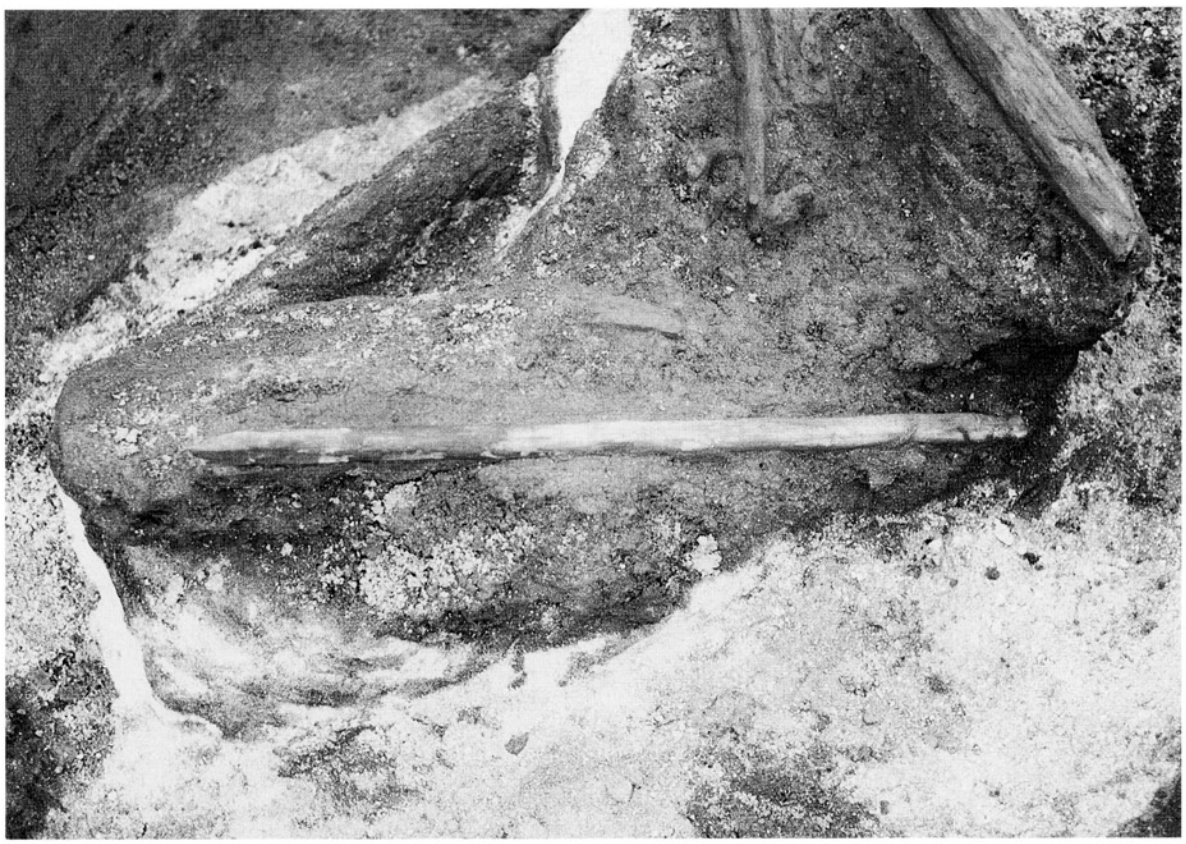
河道SR13 (3)

遺物出土状況（d 3グリット付近）

馬形木製品（154）建築部材（158）他出土状況（南から）



上層南壁土層（北から）



加工のある抗（155）出土状況（南から）

河道ＳＲ１２（南から）

竪穴住居ＳＨ２４（南から）

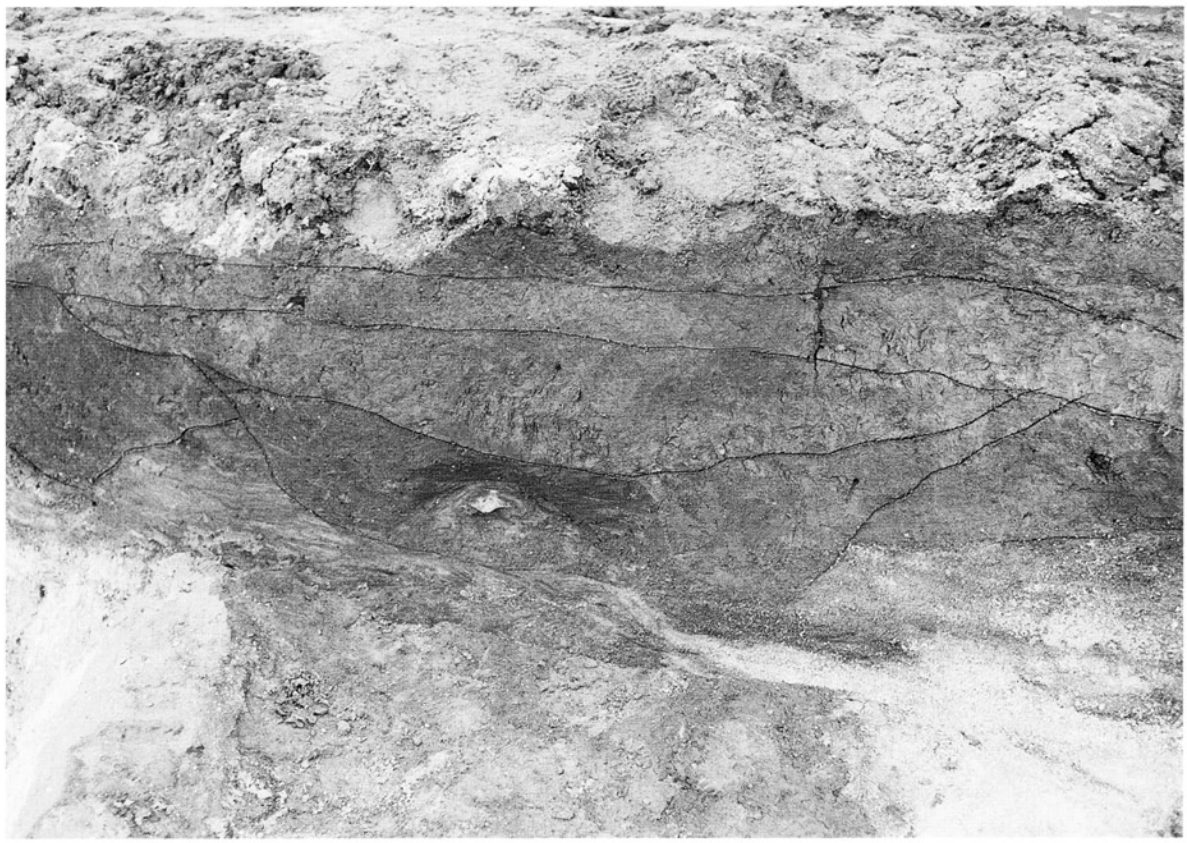
河道ＳＲ２０（南から）

河道ＳＲ１８（南から）

中世遺構面

調査区南部（南西から）

調査区南部（北東から）



溝ＳＤ１１土層（北から）

井戸ＳＥ８（南から）

井戸SE17 (1)

上部（南から）

結桶上部と土器枠（南から）

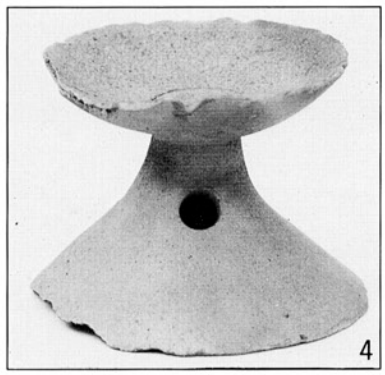
井戸SE17 (2)

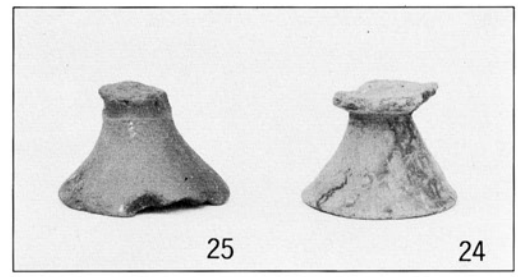
断ち割り（西から）

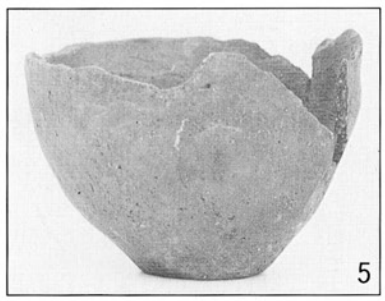
外側土器枠除去後（西から）

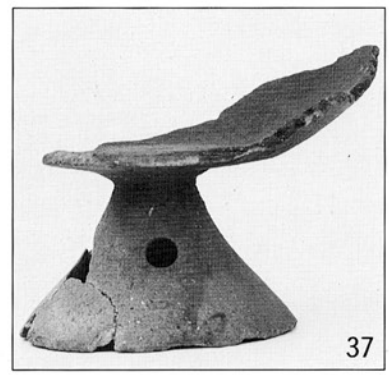
PL. 12

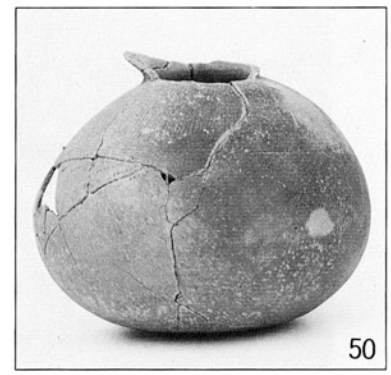
出土遺物 (1)

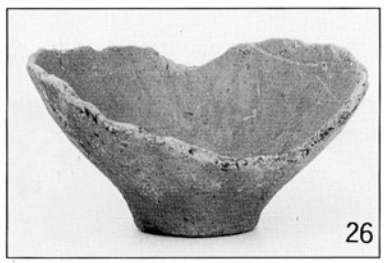

4

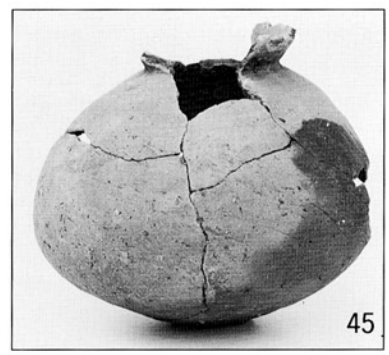

25 24

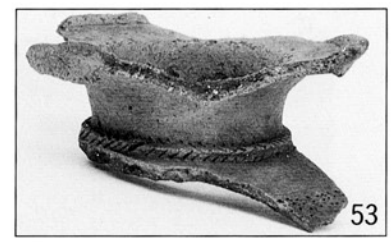

5

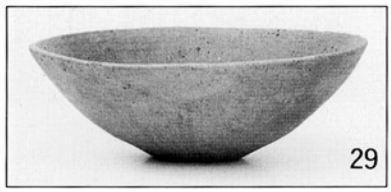

37

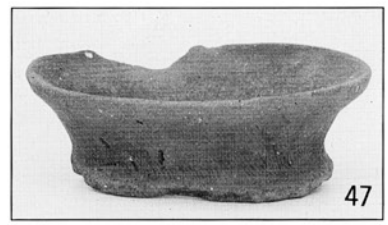

50

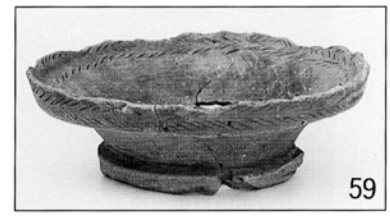

26


45

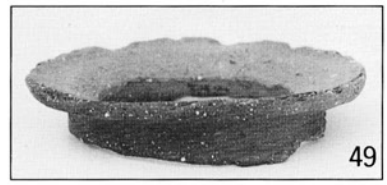

53


29

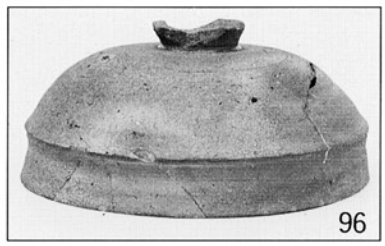

47

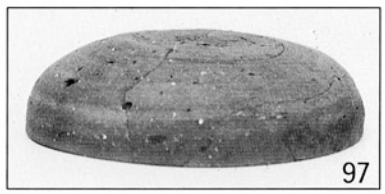

59

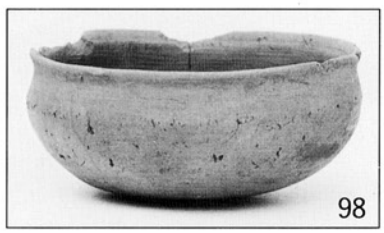
32


49

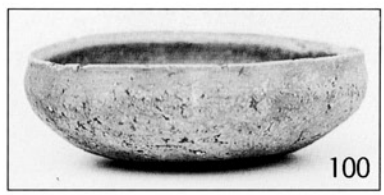
69

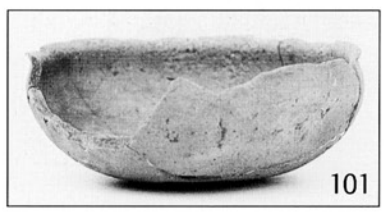

96


97

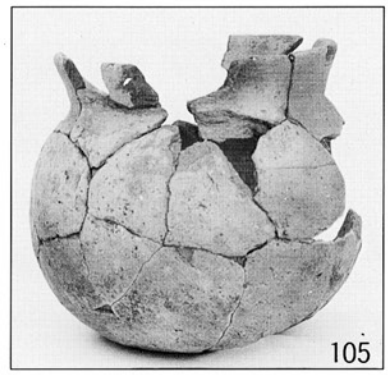

98

99


100


101

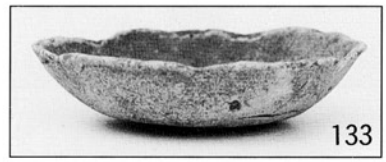
104

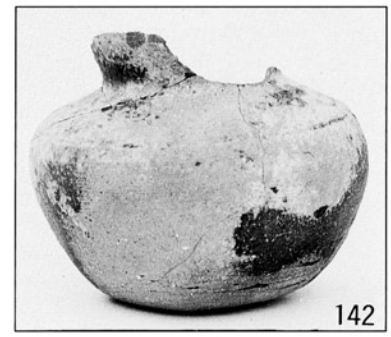

105

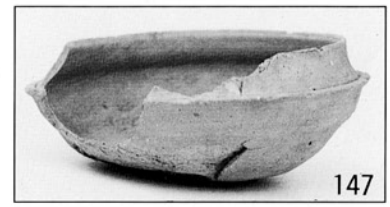
109

113

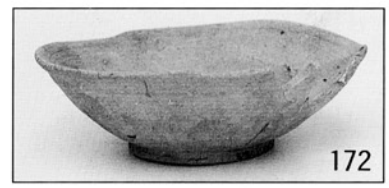
125


133


142


147

170

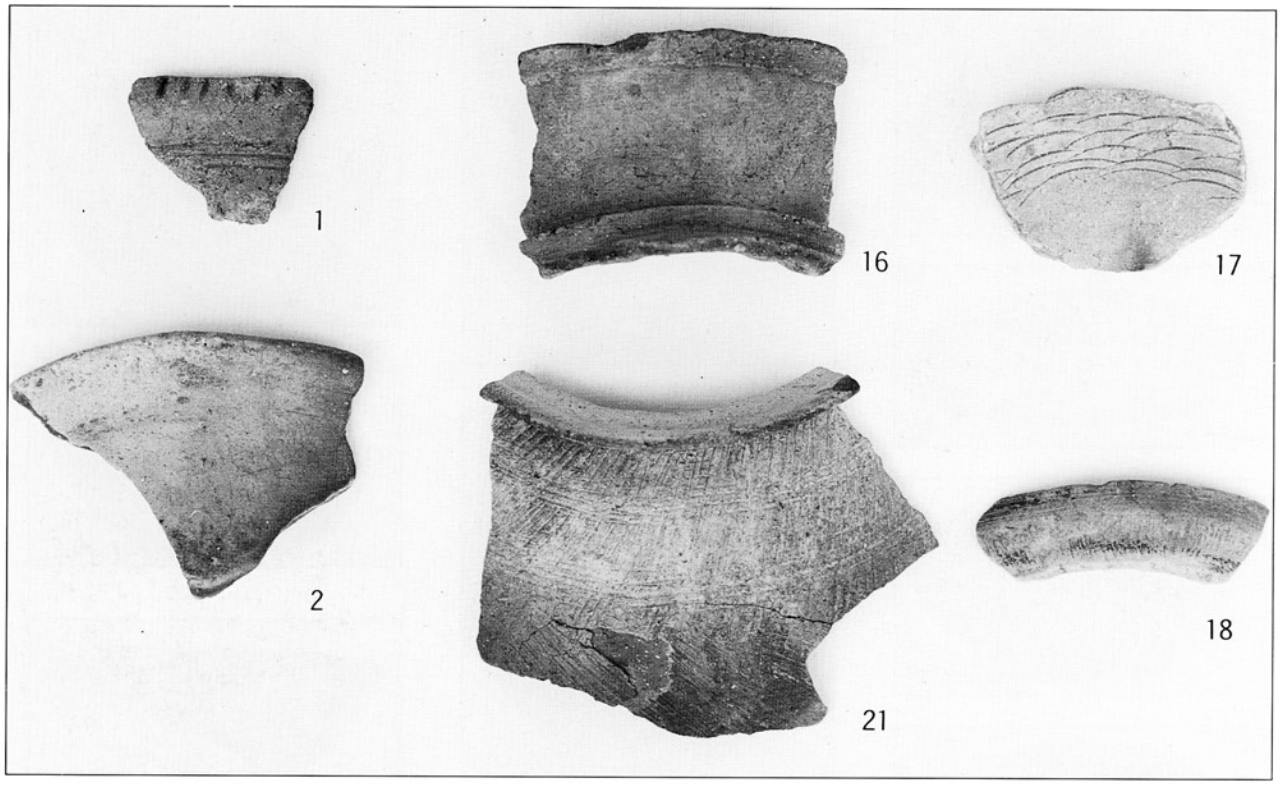

172

174

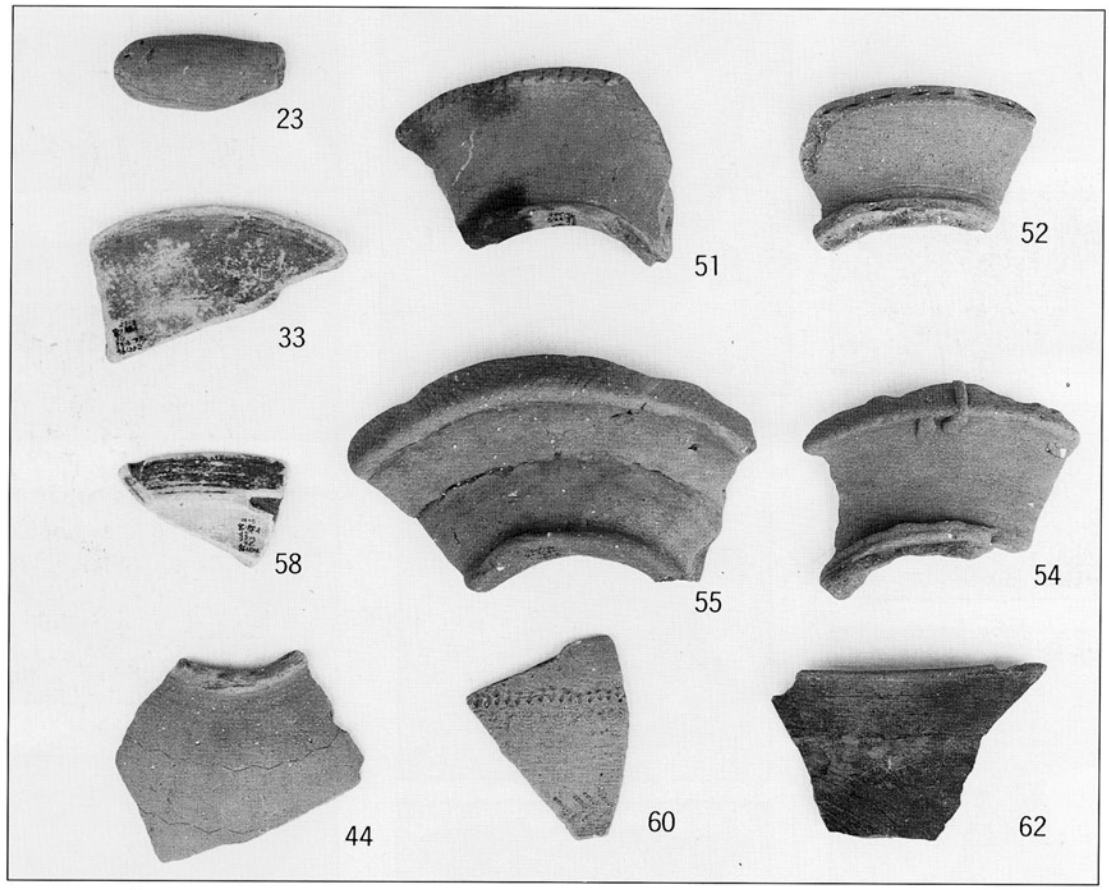
175

176

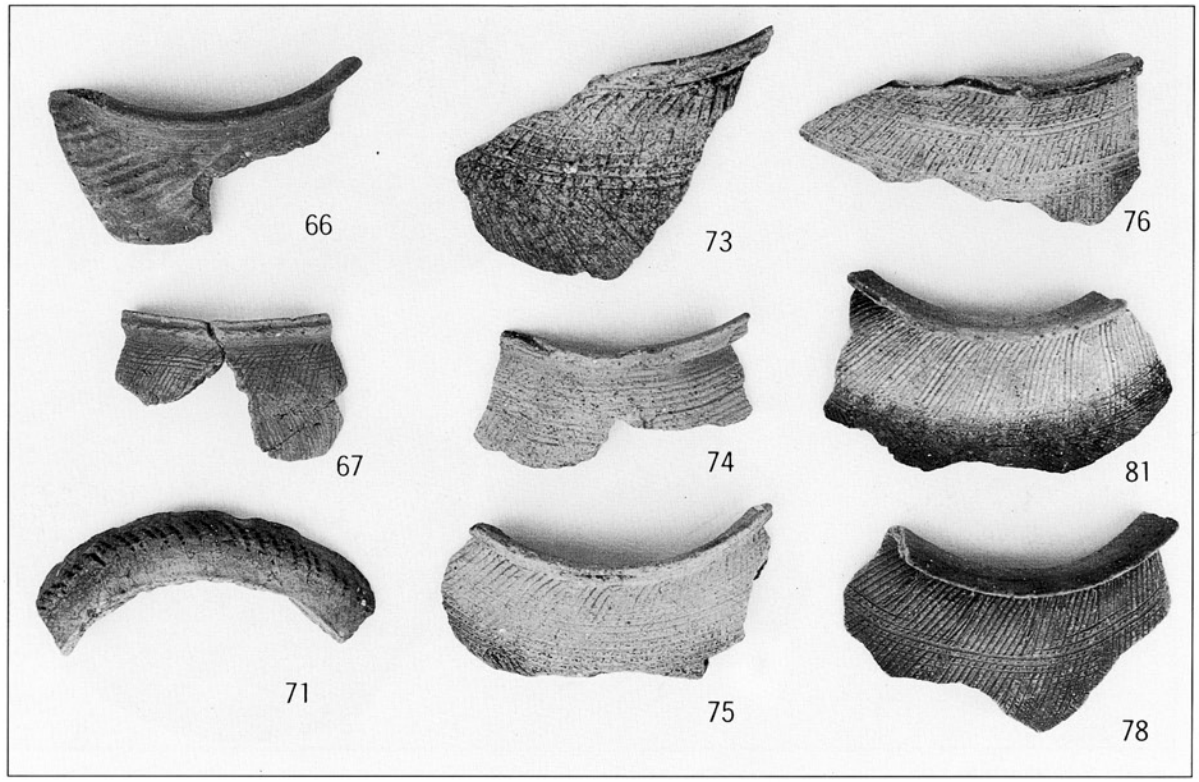
出土遺物 (3)



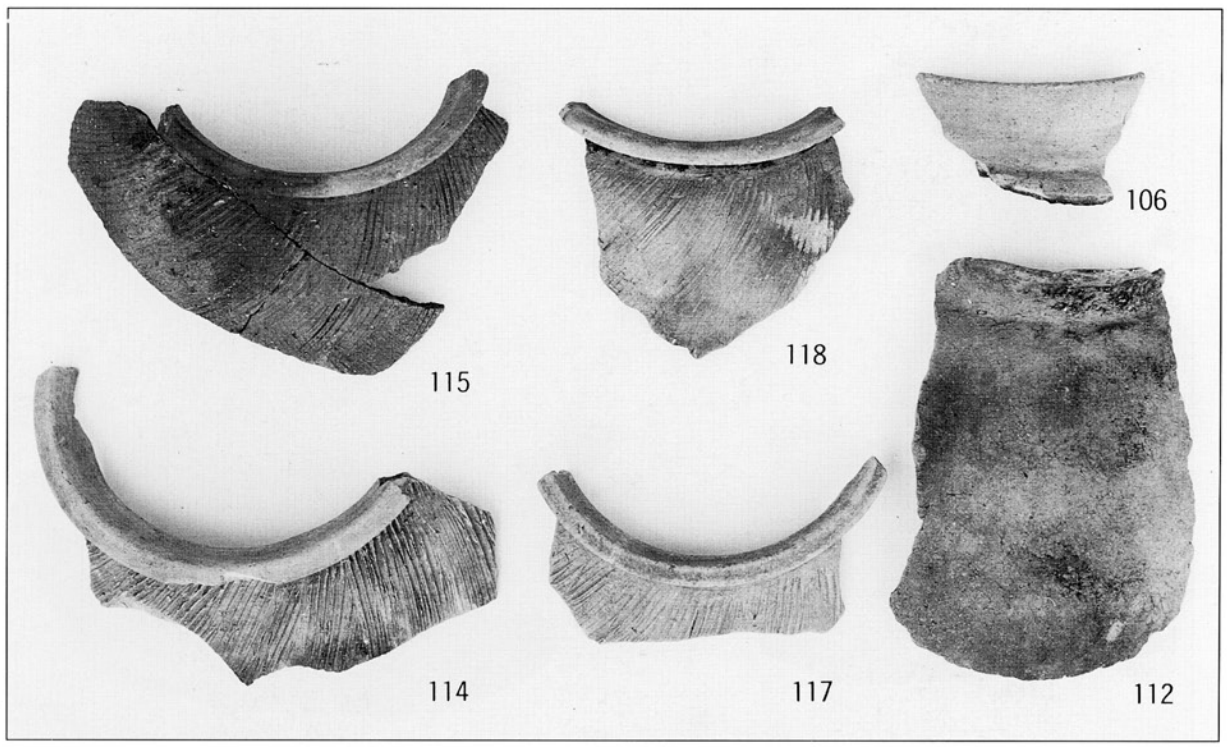
弥生前期土器・SR12出土土器



SR13下層出土土器、壺ほか

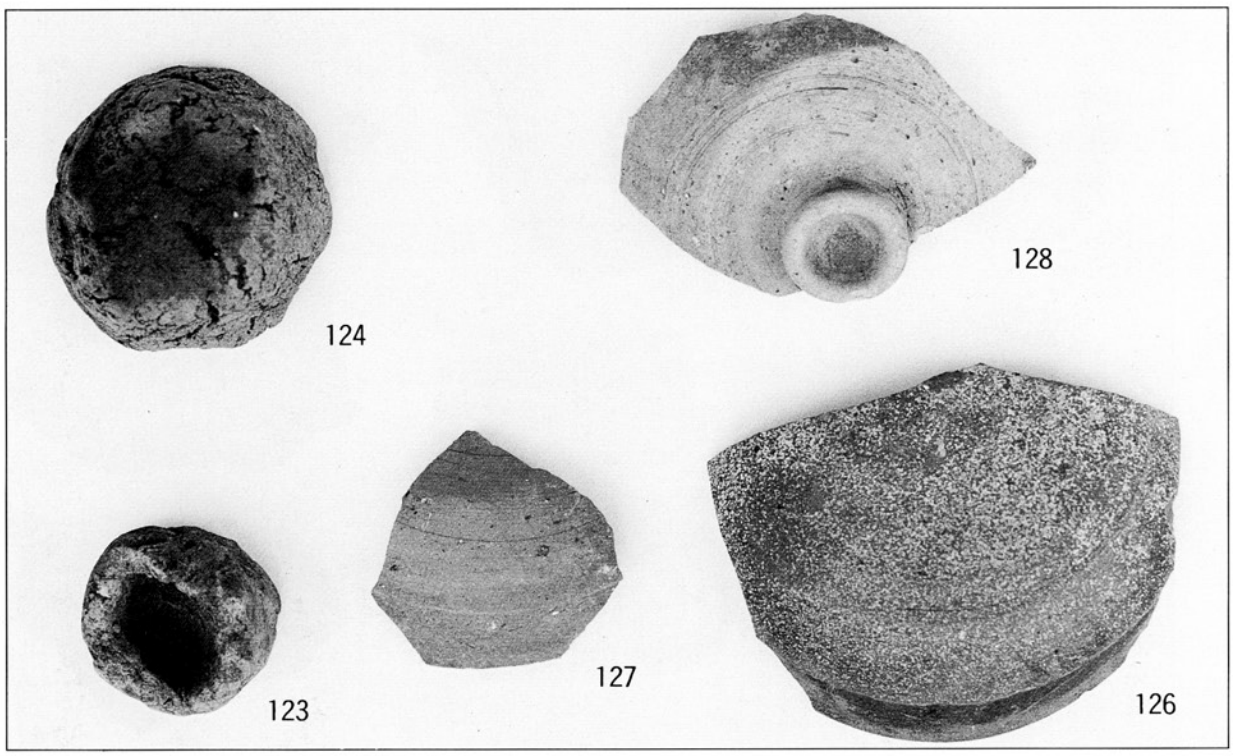


SR13下層出土土器　甕

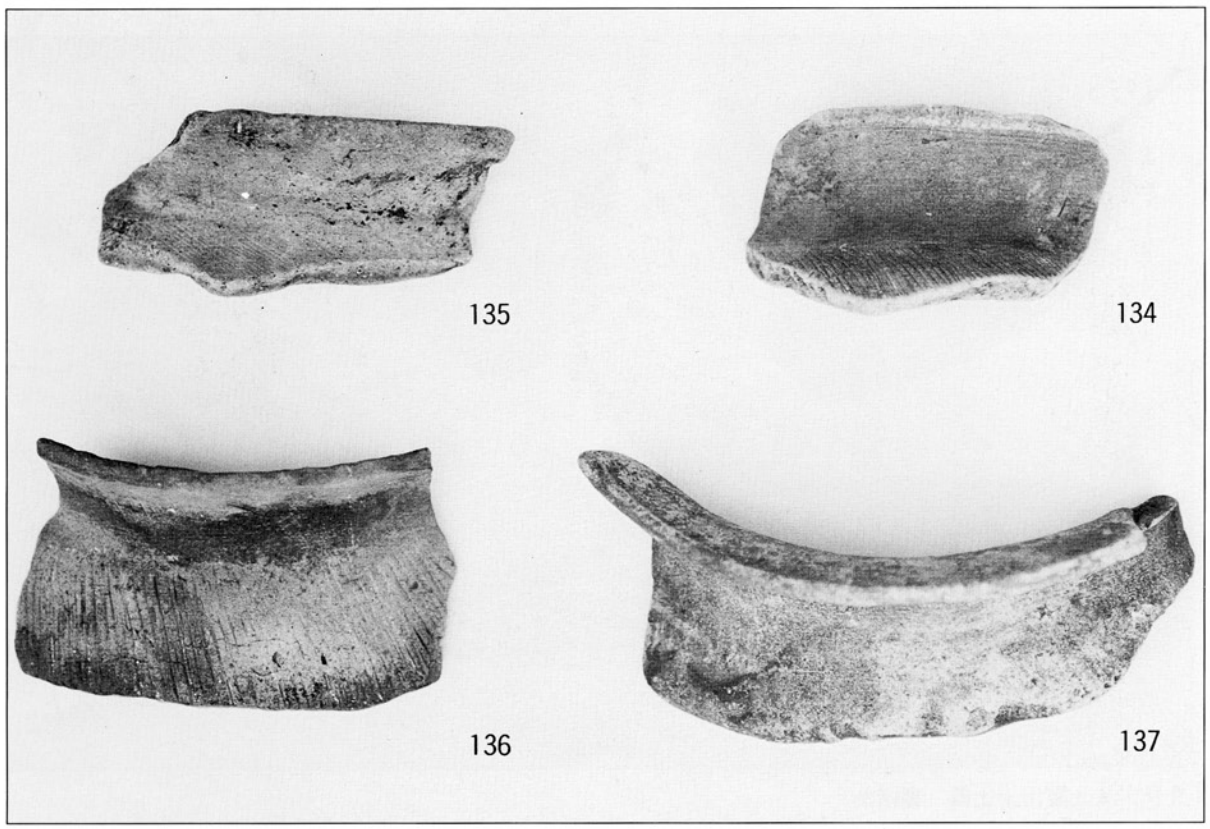


SR13上層出土土器　甕ほか

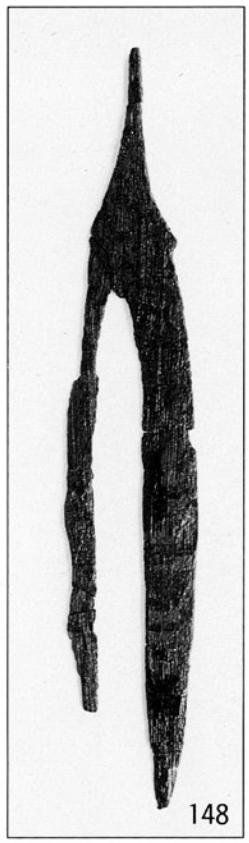
出土遺物 (5)

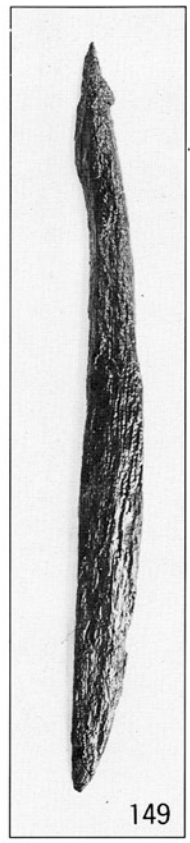


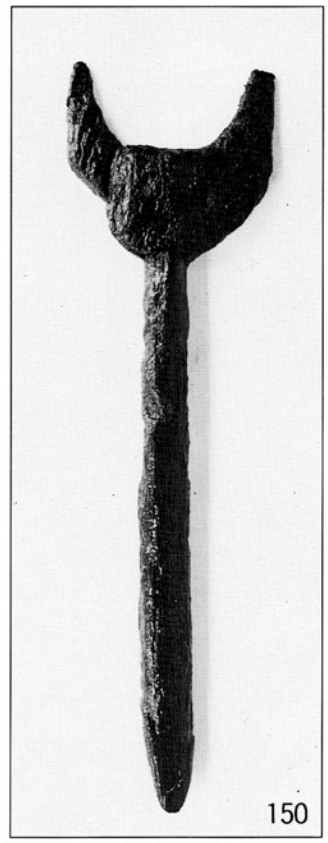
SR25　出土遺物

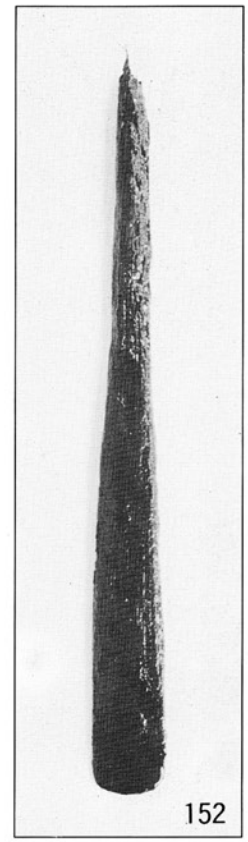


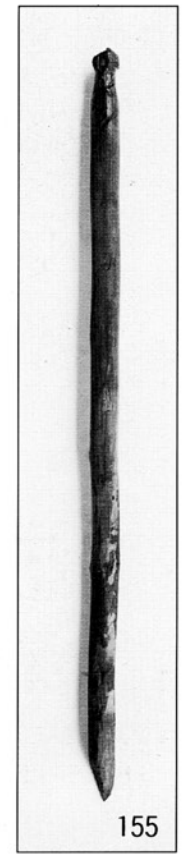
土師器甕


148

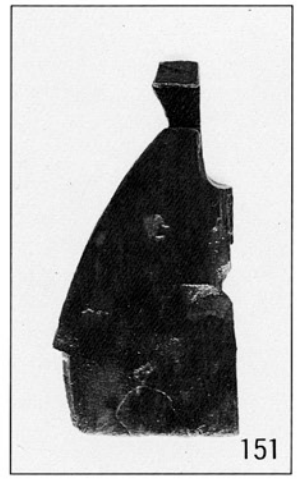

149

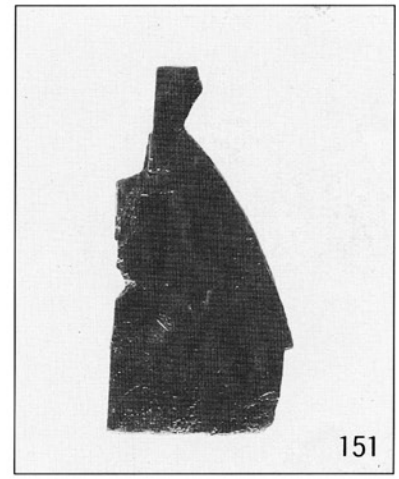

150

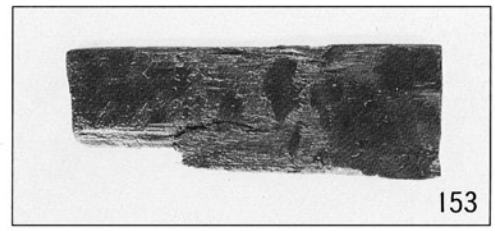

152

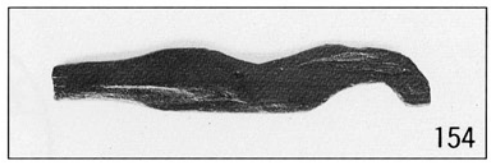

155

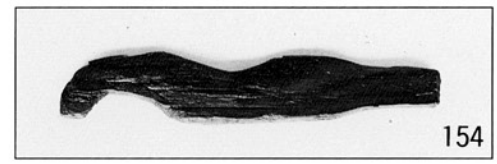
156


151


151


153


154


154

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告153

宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ

－一志郡三雲町上ノ庄所在遺跡の調査－

1997・3

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　㈲第一プリント社